



# 東北大学附属図書館報 木這子

## BULLETIN OF THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

- 木這子(きぼこ)とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子(こけしぼうこ)-

### 目 次

○シリーズ 貴重図書24 鉱山の仕事はきわめて誠実な職業である - アグリコラ『デ・レ・メタリカ』 - ..... 1	○平成18年度参考図書購入報告.....17
○「情報検索の小径」シリーズ 第1回 文学部行動科学研究室における情報検索教育...10	○「江戸の遊び~けっこう楽しいエコ レジャ~」を巡る話題から(4) 遊ぶ楽しみ.....19
○平成19年度大学図書館職員長期研修参加報告...13	○東北大学創立100周年記念展示 「東北大学の至宝 - 資料が語る1世紀 - 」 開催中.....26
○平成19年度目録システム地域講習会(雑誌 コース)を受講して.....14	○「文豪・夏目漱石 - そのころとまなざし」 開催中.....30
○平成19年度目録システム地域講習会(雑誌 コース)を開催.....15	○会 議.....35
○「附属図書館オープンキャンパス2007」を 開催.....16	○人事異動.....35
	○編集後記.....36

### シリーズ 貴重図書24

## やま 鉱山の仕事はきわめて誠実な職業である - アグリコラ『デ・レ・メタリカ』 -

学術資源研究公開センター助教 小 川 知 幸

「科学」をめぐる対話

T 錬金術を知っておるかの。

K なんですか、藪から棒に。知ってますよ、  
等価交換っていうんでしょ。それにしてもなん  
で先生がここにいるんですか。

T いや、授業前にきみと茶でも飲もうと思っ  
てのう。今ので、きみの読書傾向がおのずとわ  
かった気がするが、ほれ、わしが手ずから茶を  
淹れてやった。

K ありがたく頂戴します。あれでしょ、代償

なしには何も得られないというのじゃないんですか。

T 物理学でいうエネルギー（質量）保存の法則をもとにしておるようじゃが、本来それとは関係ないな。わしのいうのは、「金属は卑賤なものから、より高貴なものに成熟する固有の生長過程をもっている」という話じゃ。いわゆる錬金術師はこの生長の過程に介入してリズムを早めてやることで、鉱物を純化することができると思われていた。鉱物はすべて、時とともに金になるという、プラトン主義とか新プラトン主義とかいわれる古代から続く思想じゃが、とくに15世紀半ばから盛んになった。

K ルネサンスのころ、というわけですか。

T その通り。このころイタリアのフィレンツェにアカデミア・プラトニカ、すなわちプラトン・アカデミーという機関がつくられる。といっても知識人たちのサロンのようなものだったんじゃが、コジモ・デ・メディチが設立して、マルシリオ・フィチーノを呼んで、イスラム経由でヨーロッパに入ってきた、キリスト教からは異端視されていたギリシア・エジプトの文献をどんどんラテン語に訳して出版した。フィチーノはプラトン全集を初めてギリシア語からラテン語に翻訳した語学の天才じゃ。これをきっかけに新プラトン主義が花開く。つまり前期ルネサンスじゃな。アリストテレスはすでにキリスト教に採り入れられておったから中世にも知られておったが、プラトンは当時の人びとにはいかにも新鮮に映ったわけじゃ。

スキエンティア

K 古典古代の再発見ですね。それがキリスト教からは異様にみえた、と。そういえば、コペルニクスとかガリレオが出てくるのもこのころですよ。地動説を唱えて教会からひどい目に遭ったって。それでも地球は動く、とか。

T 「エプール・シ・ムオベ」じゃな。しかし、なにもひどい目になど遭っておらん。むしろ褒められたんじゃ。

K どういうことですか。お茶吹いちゃったじゃないですか。

T 以前にも話したと思うが、政情に問題があ

ったんじゃ。理論は非難されておらん。ガリレオの『天文対話』があまりに好評を博したために、競争相手のハプスブルク皇帝やトスカーナ大公の株が上がり、教皇庁の権威を脅かすのではないかというので、しばらく田舎に引っ込んで蟄居しておれ、というのが、かいつまんだ話じゃ。

K ちっきょってなんですか。

T まあ、表舞台に出てくるな、ということじゃな。コペルニクスも事情は同じで、そもそも新プラトン主義には「一者流出」という基本思想がある。それでコペルニクスはこの一者、すなわち太陽を神殿に喩えた。太陽が中心にあって万物を照らし出す、これは神と同じだというわけじゃ。これならとくべつ異端視されるような話ではないじゃろう。『天球の回転について』というのはそういう説明なんじゃ。

K それじゃあ、ぜんぜん科学じゃないじゃないですか。キリスト教思想とどう違うんですか。

T そこじゃ。科学というのはサイエンスじゃな。これはスキエンティア scientia というラテン語から来ておるが、この言葉は本来、「知の体系」を表しておった。ありていに言えば、神が世界をどう作ったか、そのグランドデザインはどう描かれているかを知ることがスキエンティアの目的じゃった。だからガリレオは褒められたんじゃ。あのアイザック・ニュートンが晩年に何の研究をしておったか、知っておるかの。

K ニュートンはたしか「最後の錬金術師」と呼ばれて……。

T うむ。老年に突然オカルトに目覚めたわけじゃない。彼にとって科学とは自然の中に隠された神の設計図を探り当てること、これに尽きたのじゃ。

サイエンティストとは

K 18世紀の科学者ですよ、ニュートンって。そんな後の時代まで科学と錬金術って同じものだったんですか。

T マインドとしてはそうじゃろうな。神から離れることができなかつたから、一種の哲学、思弁の学問だった。天体の運行もそうじゃな。彗星は神の意志を運ぶものと考えられておった

し、ほれ、占星術ってあるじゃろ。

K 星占いですか。きょうの運勢、今朝見てきましたよ。

T 星の位置も万物の生長過程に影響を及ぼしておるから、人間もそこからが感じがらめにされて逃れられない。というより、すべてのものが歯車のように厳密にかみ合って作動しておるといふんじゃ。時計職人としての神じゃな。

K そういえば、流れ星は神さまが天球を開けたときに漏れた明かりだから、願いごとをすれば届くってのを聞いたことがありますね。

T ほ、ロマンチストじゃの。ちょっと違うが、現代人にもそんな心があるわけじゃ。ともあれ、サイエンスは19世紀中ごろには別の様相をみせておった。サイエンティストという言葉は1834年にウィリアム・ヒューエル William Whewell というイギリスの科学史家がつくったといわれる（年代については諸説ある）。この「イスト」という言葉は、ピアニストとかマルキストとか、専門技術者を示す接尾辞じゃ。彼は、体系を追求する哲学としてのサイエンスと訣別して、いまや専門分化した個別分野を研究するのがサイエンスの意味としてぴったりだと考えたのじゃろ。日本でも明治4年ごろに「科学」という言葉を充てたが、もうこのころには、サイエンスはさまざまな学科に細分化した学問だったからじゃろ。

K アルケミストもイストですね。

T 錬金術師も一種の職人的技術者ということじゃな。いわば金属熟成・純化技術者ということかのう。最終目的はいうまでもなく金の錬成じゃった。しかしその背景には神に支えられた世界観があったんじゃ。

#### 観察と経験の世界

K 先生、お話長くなりそうなのでお茶菓子とってきます。近代科学が哲学と袂たもとを分かつのは、けっきょく19世紀を待たなければならなかったんでしょうか。

T そうではない。スキエンティアは思弁の学問じゃったが、その一方に個別技術の世界があった。これはいわば職人のあいだの口伝であり、秘儀じゃった。大学でラテン語の文献解釈に明

け暮れるエリートとは無縁の世界。しかし技術の世界とのかかわり方が変化するのには、またしても15世紀なんじゃ。より正確にいえば15世紀末から16世紀前半に、古典の教科書から実際の観察と経験に重点を移した「実学者」の登場によってサイエンスは変わり始める。たとえば解剖学のアンドレアス・ヴェサリウス。1543年に弱冠29歳で『人体の構造について』（ファブリカ）を出版したんじゃが、彼は自分の手で人体を解剖して、ほら、ここには古代のガレノスのいう動物生気の通る管などないじゃないか、とやる。もう一人は鉱山学者のゲオルギウス・アグリコラじゃ。

K だれですか、それ。

#### 鉱山学の書

T 「鉱山学の父」と呼ばれておる。もっとも、そういわれるようになったのは18世紀に鉱物学者のヴェルナーに再発見されてからじゃがな。ほれ、ここに一冊の本がある。

K .....なんだかタイトルが長すぎて読みづらいですね。

T ベルクヴェルクブーフ、いわば鉱山学の書じゃ。要点だけ読めばよいて。アグリコラの『デ・レ・メタリカ De re metallica』のドイツ語版じゃ。（図1）

K こんなの、よく見つけてきましたね。

T わしの手許には新訂貴重図書目録洋書篇があるからな。これによれば、この本は平成8年から貴重図書として東北大学附属図書館の貴重書庫に収められておる。もともとは工学部の前身で東北大学包摂校の仙台高等工業学校の採鉱冶金学科にあったものらしい。明治43年ごろに入手されたようじゃ。昔の学者は目が利くものじゃのう。

K 貴重なものなんですね。

T 初版でないのが少し残念じゃがの。初版はラテン語で書かれて1556年にバーゼルのフローベンで出版されておる。エラスムスの著作を出版して大儲けした出版社じゃ。ミヒャエリスという研究者によれば、初版は800部ほど刷られたらしい。当時としてもかなり大がかりな出版事業じゃな。翌57年にはドイツ語、63年にはイ

タリア語に翻訳されておる。東北大所蔵版は1621年に同じフローベンから出たドイツ語新版。ドイツ語版としては第3版にあたる。フォリオ（二つ折り本）で491頁あるから、ずっしり重いぞ。

K うわっ、ちょっと、何するんですか。

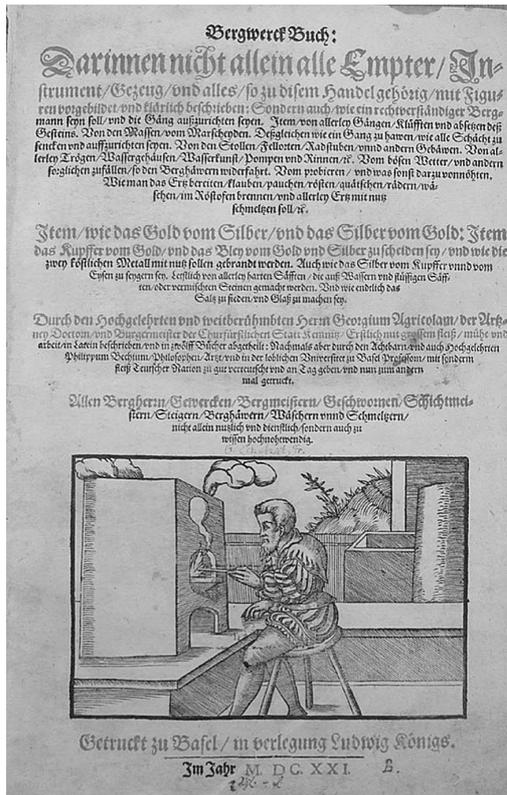


図1 『デ・レ・メタリカ』ドイツ語版

百鬼夜行

K 本の説明は、まあわかりました。で、これにどんな意味があるんですか。

T 当時、鉱山を渡り歩く自由な鉱山師、いわゆる「やまし」というのは非常に胡散臭い存在だと思われておった。鉱山そのものが金銀を掘り当てて一攫千金を狙う怪しげな連中を引きつけておったし、そもそも金属を扱う者は魔術師や錬金術師のたぐいだとみなされておったんじゃない。わしは最初に、「金属は卑賤なものから、より高貴なものに成熟する固有の生長過程をもっている」といったな。地中にあるものはおのずと成長すると考えられておった。大地は子宮だということじゃ。だから鉱山は、鉱物資源が尽きてもしばらく放っておけば、また鉱石が再生

すると思われておった。坑道をふさいだり隠したりする不正行為も横行した。

K 成長を邪魔しなければ鉱物はどれも金になる、というわけですか。

T その通りじゃ。あのダ・ヴィンチさえも、金の鉱脈の先がぐんぐん伸びて、触れた先が金に変わるのをみた、などという始末。アグリコラは当時の鉱山の蔑まれようを、「<sup>さげす</sup>鉱山師たちの世界は詐欺とごまかしと嘘と百鬼夜行だ」、「多くの方は鉱山（かねほり）の仕事は一攫千金をあてにしたあさましい仕事であり、技術も骨折りもいらぬ仕事だと考えている」（三枝博音訳）などと表現しておる。

K ひどい言われようですね。

T だが現実だったんじゃないろう。アグリコラは反論したいわけじゃ。ちょっと読んでみようかの。「いたるところにそれほど多くの錬金術師が過去にも現在もいて、夜となく昼となく精魂込めて山なす金銀を産み出そうとしている」。「それなのに人がそれで金持ちになったという話をついぞ聞かない」。

K バッサリ、ですか、はは。

T 彼は『デ・レ・メタリカ』の第1巻をまるまる使って、いかに鉱山の仕事が本来は錬金術などとは無縁であるか、いかに誠実な職業であるかを力説しておる。アグリコラは大学で教育を受けて、イタリアで医学を修めた人文主義者じゃ。本名は姓をパウアーと書いて、農夫を意味するが、当時の知識人の習慣でこれをもじったラテン名を名乗っておる。そんな学者が怪しげな鉱山なんぞで何しとるんだ、という雰囲気だったんじゃないろうな、知的エリートのあいだでは。しかしこれは真の意味でのフィールドワークの始まりだったんじゃないよ。

ダウジングを否定

T アグリコラはイタリアで医学を修めたあと、しばらくガレノスの著作の校訂に携わっておる。ガレノスは当時学界で最も権威のあった古代ギリシアの医学者じゃ。だがそんな毎日に飽き足らなかつたんじゃないろう、33歳のときにポヘミアのヨアヒムスタール Joachimsthal という鉱山都市に向かう。このころザクセン東部と

いまのチェコのあたりではつぎつぎと銀鉱が発見され、いわば「シルバーラッシュ」の状態じゃった。ほれ、鉱山が操業開始すれば鉱夫が集まり、家族が集まり、町ができて商人が来て物を売り、となるじゃろう。ヨアヒムスタールもそんな町の一つで、1511年に銀鉱が発見されてから、わずか20年足らずで1万8千人もの住民を抱えるようになった。当時のプラハ、ポローニャに匹敵するほどの規模じゃ。多いときは年に14トンもの銀を産出して、ボヘミア全体の銀生産の3分の2を占めた。この町の名前にちなんで「ターラー銀貨 Taler」という通貨ができたんじゃよ。

K あっ、それ知ってますよ。ドル Dollar の語源になったっていう。

T そうじゃな。町は大商人や鉱山株で儲けようとする資本家も集まり、学者を何人も抱えたりして、一種の「北のルネサンス」の様相を呈しておったんじゃろう。アグリコラはさしあたり医者と薬局で食い扶持を得ようとした。彼は化学者でもあったから、製薬法に興味があり、自然と鉱山に足が向いたようじゃ。ところが、あっという間にその魅力に取り憑かれた。

K へえ。(ポリッ)

T この図版を見てくれんかの。(図2)



図2 占杖と試掘による鉱脈探し実験

K これは.....地面を掘ってる人がいますね、採掘してるところですか。左には手にみような棒きれをもって歩いてる人がいますね。あっ、これってもしかしてダウジング。

T 気づいたかの。当時は「占杖 virgula」といわれて、これをもって歩くと、鉱脈のあるところがわかるといわれていた。鉱山師がよく使っていたんじゃ。アグリコラは「占杖など何の役にもたため」と書いている。この図版で棒をもって歩いているのはアグリコラ本人だといわれておるが、まさに「実験」じゃな。鉱脈の探し方は鉱山学のまさに基本中の基本。たとえばこのころは、太陽の光がよく当たる斜面には鉱脈が伸びているとか、そんな言い伝えがあった。そんなわけはなかるう、草木じゃないんじゃから。彼は32枚もの図版を用意して、鉱脈や亀裂の走り方を解説しておる。これに併せて方位の測り方、羅針盤の使い方、測量法なども説明して、合理的な鉱脈発見法があるのだ、と説く。ちなみに『デ・レ・メタリカ』の図版(木版画)は全部で292枚。プロの画家、版画家を自前で雇って作らせたんじゃ。

K 膨大ですね。図鑑といったほうがいいのかも。

T この視覚性が、この本の大きな特徴、画期性でもあるのじゃ。

#### 巨大プラントとしての鉱山

K 鉱山の書というなら、図版には鉱山労働の様子も描かれてるんですか。

T むろんじゃ。初めに鉱山師を偶然や魔術とは無縁の存在として定義したのはわけがある。アグリコラは、鉱山師は鉱物学や測量学の専門家であらねばならないだけでなく、溶鉱炉や巻き上げ機など鉱山の基本設備を建設し、労働者の福利厚生に気を遣い、さらには法的争いにも備えねばならないという。つまりは鉱山全体を把握している必要があるというんじゃ。一種の経営=技術者じゃな。この本はその立場で書かれた。アグリコラは見たままを書き、見なかったものは書かなかったといっておるが、その必要な全体を、知りうるかぎりでも総合したのがこの本なんじゃよ。したがって上梓するまでに20年もかかってしまった。『デ・レ・メタリカ』は死後によりやく出版されたんじゃ。

K 一生の半分を使ってしまったんですね。

T それだけの価値があると思ったんじゃろう。ところで、さっきの質問じゃが、この図版

はどうじゃ。(図3)

K うわぁ、ずいぶん大きな水車ですね。

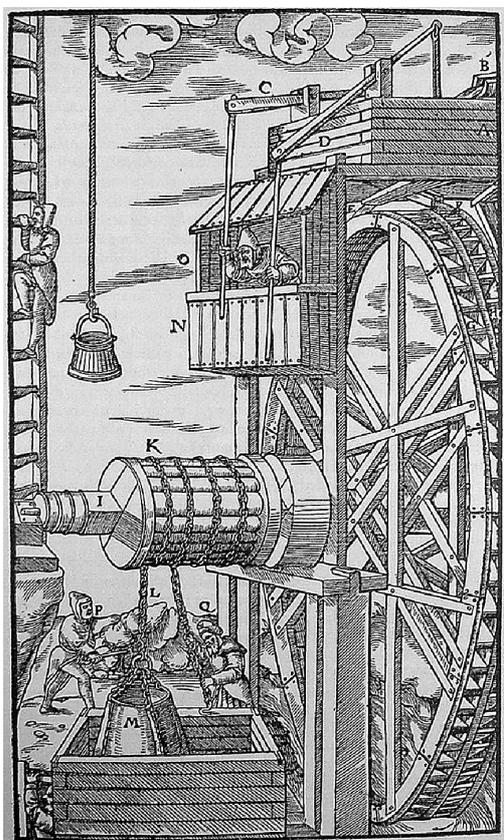


図3 水車式揚水装置

T これは水車式揚水装置，ケーアラート Ker-rad と呼ばれるものじゃ。水車の直径は36フィート，およそ11メートルもある。おそらく当時最大規模のもので，地下200メートルの坑道から水を汲み上げることができたといわれておる。動力はもちろん水。上のゴンドラに乗った操縦者が両手でカムを操作して，水流を調節して水車をまわす。よく見ると，水車の羽根が入れ違いについておるじゃろう。水車は左右のどちらにも自在に動かせたんじゃな。ただし，これだけ大きなものになるとまわすのにかなりの水量がいる。乾期になって止まってしまうと困る。操業ができなくなるからな。だからスロヴァキア東部の鉱山には，ヨーロッパ初の堰止め湖が建設されていたということじゃ。

K ダムまで造っちゃうんですね。ところでさっき揚水装置っていわれましたけど，坑内には水がたまるということなんですか。

T そうじゃ。このころの採鉱は，鉱脈を発見するとまず縦に何本も坑道を掘り進めて，その上に巻き上げ機を設置する。鉱石を運び上げたり，鉱夫を降ろしたりするんじゃな。そして縦の坑道を地下で横につなげて，さらに掘り進める。(図4)この縦坑と巻き上げ技術によって，より深く鉱脈を探ることができるようになったが，しかし深く掘れば掘るほど，上に運び上げるのに大きなパワーが必要になった。初めは人力で十分だった巻き上げ機も，やがて馬を何頭もつないでまわしたり，ダムを造って水力を利用するまでになった。鉱山は莫大な建設コストや維持コストのかかる，いわば巨大プラントに変貌しつつあったんじゃ。もちろん坑内にしみ出た水の量もばかにならない。大がかりになればなるほど鉱夫は事故にも遭いやすくなる。

#### 山の霊

K 鉱山の事故って，たまにロシアとか中国のほうで聞きますけど，日本ではほとんど聞かないですね。

T きみの若さでは事故が身近なニュースだったころの日本はもう今は昔じゃろうな。とはいえ，よく聞くアスベストの問題だって決して鉱山に関係のない話じゃないんじゃよ。鉱山労働はつねに危険と隣り合わせじゃ。アグリコラに戻るが，彼は採掘作業に携わる鉱夫の事故や病気にも触れておる。坑内には冷たい水が多量に湧き出ているし，逆に乾いた空気が充満して，鉱夫は手足の病気にかかりやすくなるとしておる。作業中に吸い込んだ<sup>じんあい</sup>塵埃のために肺病にもかかるともいっておる。いわゆる「けい肺」じゃな。

K どんな病気なんですか，それ。

T 長年坑内で作業をしておると，肺に細かな鉱物の粉塵が溜まってだんだんと呼吸がしにくくなる。ひどい場合は死んでしまう。現在では「じん肺」ということが多いが，江戸時代の鉱山でも，けい肺のせいで鉱夫はあまり長生きできなかったことが知られておる。一生のあいだに4回も5回も夫をもつ妻がおる。逆に考えれば.....。

K 離婚が多かった，ってわけじゃないですよ

ね。夫に先立たれてしまう。

T そうしたことじゃな（荻慎一郎氏の研究による）。それ以外にも、当時のヨーロッパ鉱山では、切り羽、つまり掘削の先端部分で、岩盤に火をかけて岩石をもろくする手法が採られておったから、坑内にガスが充満する。アグリコラは、「これに触れると身体はたちまちむくみ上がって動けなくなり、しびれてきて、なんの苦痛もなく死んでしまう」と書いておる。

K 怖いですね。

T ガスが消えたように見えても、しばらくはまだ水たまりの中に潜んでおるから注意せよという。

K 一酸化炭素中毒ってことでしょうね。

T われわれはそう思う。じゃが、アグリコラは祈りと断食によって退散させることができると言っておる。山の霊 Berggeist のせいだというんじゃ。

K えーっ。

T 原因がわからなかったんじゃろうな。アグリコラも決して時代を超越していたわけではなかったんじゃ。



図4 縦坑と横坑

医者として

T 目に見えぬものにいろいろな名前をつけて怖れる。あるいは敬ったりする。現代人でもよくやることじゃ。医学の歴史でも、後になってみれば当たり前のことが、強い非難を浴びることがある。殺菌消毒を勧めた19世紀のゼンメルワイスというウィーンの医者は学界から総スカンを喰った。細菌の存在が知られていなかったからじゃ。そう考えれば、アグリコラは非常に善戦しておるな。事故や病気を防ぐには、効率のよい排水装置や換気設備が必要不可欠であり、それは作業効率を高めるとともに鉱夫の生命を守るものと説いておる。（図5）知ってか知らずか、精練所に塵埃と煤煙の除去装置を設置することも勧めておる。後年、ザクセンを大規模なペストが襲ったとき、アグリコラは町の外にラザレット Lazarett という隔離病棟をつくって患者を一時隔離した。これで彼のいた町は救われたんじゃ。

K 医者としてもすぐれた人だったんですね。

T ペストの原因が、罪深い生活に対する神の罰だなどと思われていた時代じゃからな。

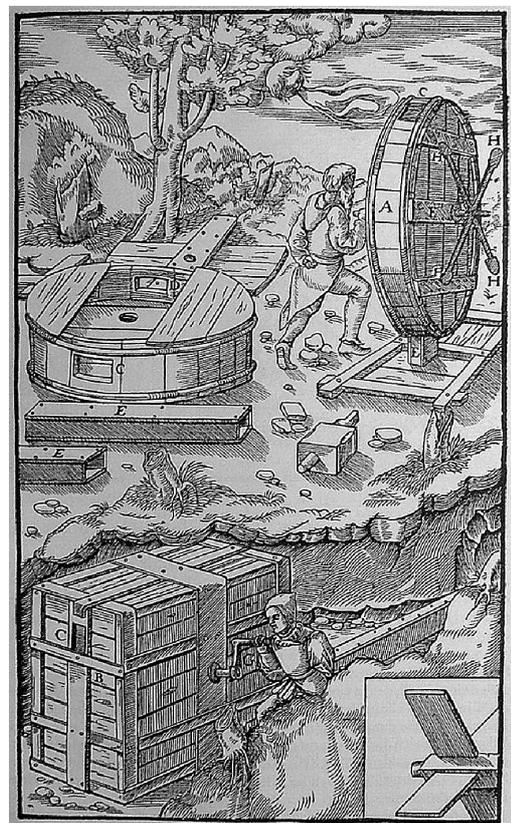


図5 送風翼式風箱

現代の「ヤマ」

K ところで先生、日本ってなんで鉱山がなくなっちゃったんでしょう。先生のお話で思い出したんですけど、『もののけ姫』って、鉱山が舞台になってるんですよ。たしか製鉄業だったかなあ。

T なくなったわけではないぞ。いまでも立派に操業してる鉱山はいくらでもある。日本では「ヤマ」といえば、まず炭坑のことを指したらしいから、ごく最近まで採炭産業は日本の基幹産業のひとつじゃった。おおむね70年代中ごろまでじゃな。ちなみに日本では鉄鉱石がほとんど産出しなかったから、製鉄業は砂鉄を集めたり、刀を輸入して鑄炭したりしていたこともあった。ただし、製鉄業がそれほど発展しなかったのは江戸時代に鉄砲が禁じられたり、平和で大砲を鑄造する必要がなくて技術が停滞したという経緯もあるそうじゃ。さて、話を戻して炭坑じゃが、日本では今どれくらいの石炭が消費されておるか、知っておるか。

K 石炭ですか。うーん、わからないけどそんなに多くないんじゃないですか。

T 1億6,200万トンじゃ(2004年統計)。国内生産のピーク時1973年の需要は8,300万トンじゃったから、国内需要は、ほぼ倍増しておるな。

K えーっ、30年で倍になってるんですか。

T しかも現在の石炭需要は99パーセント以上が輸入でまかなわれておる。おもな輸入元はオーストラリア、インドネシア、中国。日本は世界最大の石炭輸入国じゃ。輸入した石炭のおよそ4割は製鉄原料に使われ、4割が電力生産に使われる。つまり石炭火力発電じゃな。日本の電力のおよそ4分の1以上が石炭から生みだされておる。石油電力は石炭の半分ほどしかない。

K 先生が石炭の話を始めたわけがようやくわかりました。製鉄業と関係が深かったんですね。それにしても火力発電って重油を燃やしているだけかと思ってました。でも石炭の需要がそんなにあるなら、国内の炭坑をもっと残しておいてもよかったんじゃないかと思っちゃいますね、あの夕張だって炭坑でしたよね。

T もっともな話じゃな。だが、採炭の過程で

は大量のCO<sub>2</sub>や硫黄酸化物を排出する。それに原料炭は安価じゃから、コストに見合わない。事故による落命の危険も大きい。だから70年代に政策を転換したんじゃないよ。

K 環境に、エネルギーに、経済ですか。まるっきり現代の問題に直結してるんですね、鉱山って。

対話のおわりに

K そろそろ授業が始まりますよ、先生。お話まとめますと、サイエンスが、錬金術のような職人的技術とかかわることで神の設計図という世界観を捨て、ともに別の道を歩み始めた。古典古代との接触だけじゃなくて、観察と経験、あるいはフィールドワークと実験という手法を駆使して、やがて「科学」となった。その「始まりの始まり」が15世紀末から16世紀にかけてのアグリコラのような人物にあった。そんなことを先生はおっしゃりたかったんですね。

T その通りじゃ。嬉しいのう。

K 鉱山にもなんとなく詳しくなりましたし。たまには先生とも話してみるもんですね。

T うむ、『デ・レ・メタリカ』をもってきた甲斐があったというものじゃ。

K 話があんまり長いんで茶腹になっちゃいましたけど。

(おがわ・ともゆき)

#### 参考文献

- Ertle, Georg J.M.: Georgius Agricola. Dem Andenken des großen Gelehrten zu seinem vierhundertsten Todestage, in: Glückauf, Jahrg. 91, Heft 47/48, 1955, S. 1296-1307. (山中繁 訳「ゲオルギウス・アグリコラ - 四百年祭に当り偉大なる学者を追想して -」『グリュックアウフ』第4巻第12号(1955), 587 - 600頁)
- Michaëlis, Rudolf, Prescher, H. u. Horst, Agricola-Bibliographie 1420-1963 und Bestandaufnahme der Werke des Dr. Georgius Agricola mit bibliographischen Forschungsergebnissen, Berlin 1971.
- Naumann, Friedrich (hrsg.) Georgius Agricola 500 Jahre, Wissenschaftliche Konferenz vom 25.-27. März 1994 in Chemnitz, Freistadt Sachsen, veranstaltet von der Technischen Universität Chemnitz-Zwickau und der

- Georg- Agricola-Gesellschaft zur Forschung der  
Geschichte der Naturwissenschaften und der Technik  
e.V., Basel; Boston; Berlin; Birkhauser 1994.
- アラン・ド・リベラ (阿部一智・永野潤 訳) 『中世知識人  
の肖像』新評論, 1994年
- ミルチャ・エリアーデ (大室幹雄 訳) 『鍛冶師と錬金術師』,  
せりか書房, 1986年
- 小川知幸 「15・16世紀における中央ヨーロッパの鉱山業」  
『ヨーロッパ文化史研究』第6号 (2005), 93 - 111頁
- 三枝博音 (訳著) 『デ・レ・メタリカ - 全訳とその研究』  
岩崎学術出版社, 1968年
- 瀬原義生 「中世末期・近世初頭のドイツ鉱山業と領邦国家」  
『立命館文學』No.585 (2004) 137-96頁
- 中沢護人 「ゲオルク・アグリコラと『デ・レ・メタリカ』  
- 鉄冶金学の序曲」 『科学史研究』Vol.54 (1960), 9-20  
頁
- 中山 茂 『歴史としての学問』中公叢書, 1974年
- 村上陽一郎 『科学史からキリスト教をみる』創文社, 2003  
年
- 山本義隆 『磁力と重力の発見』みすず書房, 2003年

## 文学部行動科学研究室における情報検索教育

文学研究科・准教授 木 村 邦 博

文学部・行動科学専修では、第3セメスターに、学部2年次学生に対して行動科学基礎演習「行動科学の基礎技術」という授業を提供している。この授業では、行動科学的・社会科学的な考え方の基本を学生が習得することを目指して、次の2つのことを並行して学生に経験してもらうようにしている。ひとつは研究の基礎技術に関するレポートへの取り組みである。このレポート作成を通して、研究にとって大切なことは何かについての理解、情報検索（特に文献検索）の技術の習得、クリティカル・シンキングの実践、発表の技術（特に作文の技術）の習得、などが達成されることを期待している。もうひとつは、上記のレポート作成を通して身につけた基礎技術を活用して、指定された課題に関する共同研究を実施することである。受講生には、教員が提示した4つの課題に対する希望を表明してもらい、その希望に配慮しながらグループ編成を行う。各グループは8月までの約4ヶ月の期間、共同で、各課題に関する基本文献や情報検索によって得た文献等を読み、クリティカルに思考し、中間報告会・最終報告会で口頭発表を行い、最終レポートを執筆する。

この行動科学基礎演習「行動科学の基礎技術」では、2003年度以降、実質的に私が中心になって、学生の指導にあたってきた。この授業の中で、最も時間をかけていることのひとつが、情報検索、特に文献検索の技術の習得とその活用ということである。

情報検索技術に関しては、2003年度以前からも附属図書館の専門家の方に、講習をお願いしてきた。2003年度以降は、以前にも増して、図書館の参考調査係（あるいは総務課情報企画係）の方と綿密に連絡を取り合って、木村による情報検索・文献検索の基礎に関する解説と図書館での講習とがうまくかみ合うように、努力を重

ねてきている。まず、木村による情報検索・文献検索の基礎の解説では、『行動科学研究マニュアル』（行動科学研究室で毎年改訂し、研究室メンバー全員に配布しているもの）に木村が寄稿した文章をもとに、情報検索の基本的な考え方や、日本語・英語で書かれた本や論文を検索するための基本的なデータベースや検索サービスの紹介を行っている。図書館での講習では、図書館の所蔵検索システムや、木村が紹介したデータベース・検索サービスの実際の使い方を学んでもらう。以上のことをふまえて、研究者名からの文献検索（日本語・英語の本や論文）、研究トピックからの文献検索（日本語・英語の本や論文）、引用関係からの文献検索（英語の論文）に関する練習問題に取り組んでもらう。そして、その検索過程（使用したデータベース・検索サービスと使用したキーワード、実際の試行錯誤の過程など）と、結果として作成された文献リストを、レポートにして提出してもらっている。

実際の練習問題を、以下に記しておこう。

- 1．直井優はどのような本や論文を書いているかを調べたい。どのようにすればよいか。
- 2．David Knoke はどのような本や論文を書いているか知りたい。どのようにすればよいか。
- 3．家族のライフサイクル（life cycle）についてどのような本や論文が（日本語・英語で）書かれているかを知りたい。どのようにすればよいか。
- 4．Hiller, Dana V., and William W. Philliber. 1986. "Determinants of Social Class Identification for Dual-earner Couples," *Journal of Marriage and the Family* 48(3):583-587 がその後、どのように発展させられたり批判されたりしているのかを知りたい。どのように

すればよいか。

以上のようなことを5年間にわたって行ってきたけれども、残念ながら、実情は、学生の情報検索技術が毎年向上していく、という理想的な状態とはほど遠い。もちろん、年度によっては、的確な情報検索技術の基礎をほとんどの受講生が身につけたといえるようなケースもあるけれども、その経験が下級生になかなか受け継がれていかない、という問題を抱えている。また、年度を問わず、文献検索が機械的な作業であるという先入観（より具体的にいうと、たとえば、インターネット上の一般的な検索サービスにひとつのキーワードを入れれば「正解」が出てくる、というようなイメージ）を学生が持っている場合には、文献検索というものが実は自ら戦略を考え試行錯誤を繰り返してみようという知的な活動であることを納得してもらうのが難しい。近年では、上述のような先入観に加えて「新しい検索システムの方が古い検索システムより優れている」という思い込みを持っている学生もいて、一般的に比べて伝統のある検索サービスの方が収録されている情報量が多いだけでなく最新の情報もカバーしていることを理解してもらうのに苦労している。さらに、上記の4つの練習問題に取り組むことによって得られた文献リストを全体的に眺めることで、実は4つの問題が互いに密接に関連した（複数の）研究テーマ・研究課題で結びついているということに気づいて欲しいのだけれども、そのような「発見」にたどりつく学生はあまり多くない。

しかしながら、文献検索・情報検索の技術は、学生が授業のレポートや卒業研究・卒業論文などを執筆するにあたって、(クリティカル・シンキング、作文や口頭発表の技術などとともに)必須のものである。また、おそらく、学生が卒業後に、どのような仕事に就いたとしても、身につけていて損のないものだと考えている。現在の指導方法の問題点を点検し改善策を考える作業を繰り返し行いながら、学生の文献検索・情報検索技術の向上をさらに支援し続けていきたいと考えている。



## 木村先生へのインタビュー

Q1. レポート・論文のテーマはどのようにして決めたらよいでしょうか。

「このようなことはやめた方がよい」ということに絞って回答したいと思います。レポートや論文で「新しいこと」を書かなければならないと考えるあまり、「新しいこと」を授業内容や指導教員の研究テーマなど以外のところから探そうとする人が多いようですけれども、これはあまり賢いこととは言えません。そうして探してきたテーマは一見「新しい」ように見えるかもしれませんが。しかしそれについては、実はすでに他の授業で扱われていたり、他の研究者たち（その道のプロ）がかなり研究成果を蓄積してきていたりするものです。むしろ、授業内容や指導教員の研究テーマに近いところで、学問的に（あるいは社会的に）「解決」がもたれている問題を発見し、それをテーマにした方が、真に「新しい知見」につながる可能性が高いように思います。

Q2. 特におすすめする参考図書・データベース等のツールがありましたら教えてください。

私の研究分野に関わる範囲のもので、かつ、できる限り汎用的なもの（他の分野の方にも有用と思われるもの）を紹介します。（おすすめ理由は紙幅の関係で省略します。）日本語の本を検索するならば「国立国会図書館蔵書目録検索・申込システム」 <http://opac.ndl.go.jp/> の「一般資料の検索/申し込み」、日本語の雑誌論文を検索するなら同じく「国立国会図書館蔵書目録検索・申込システム」の「雑誌記事索引の検索/申し込み」、英語の本を検索するなら（最適とはいえませんが）NACSIS-Webcat <http://webcat.nii.ac.jp/>、英語の論文を検索するなら Social Sciences Citation Index（東北

大学の場合、附属図書館ウェブサイトの「各種データベース」 <http://www.library.tohoku.ac.jp/dbsi/> のページで“Web of Knowledge”をクリックしさらに“Web of Science”をクリックすることを通して利用可能)をまずは活用してみるとよいと思います。

Q3. 思わぬところから研究に関する情報を得たエピソードがありましたら教えてください。

大学院生の頃、学部学生を対象とした「社会調査実習」に関する授業のアシスタント的な役割を担っていた時のことです。所得などの不平等の度合いを測定するための尺度としてよく用いられる「ジニ係数」について、自分が学生に説明しなければならなくなりました。そのためには、自分自身がジニ係数のことをよく理解していなければなりません。ところが、入手可能な日本語文献の多くでは、ジニ係数の様々な計算法・公式が紹介されているだけで、それぞれの計算法・公式がどのような考え方に基づいているものか、またなぜ異なる計算方法にもかかわらず常に数値が一致するのか、ということについて、詳しく体系的に書いてあるものはありませんでした。そこで、一方では自分で複数の公式が同値であることの証明を考えながら、他方ではジニ係数に関する日本語・英語文献を、すでに読んだ文献の引用文献リストから探したり、『雑誌記事索引』、Social Sciences Citation Index など（当時はまだ冊子体を使うことがほとんどでした）で検索してみたりしました。並行して、提唱者とされるジニ（Corrado Gini）の1912年の原著書（イタリア語）の所在の検索も行いました。ジニの本の所在は、図書館のレファレンス・サービス担当者の方に、第二次世

界大戦以前の「旧制帝国大学」に所蔵されていた文献の目録にもあたっていただいて、突き止めることができ、「相互利用サービス」を利用して、現物を短期間ながら借用させていただくことができました。これらの新旧の情報を俯瞰的に眺めてみることによって、先行研究に何が欠けているのかということが明確になり、（大学院を出た後のことですが）英文論文を書くことができました。

私の場合、他の研究テーマの時もそうですが、「教育」のために資料や文献を探したり自分の頭で考えたりすることの副産物として、重要な研究課題を発見したり、その研究課題に関する先行研究の問題点などに気づいたりすることがあり、それが自分自身の「研究」に結びつくことが多いように思います。また、ふだんから雑学を心がけていて、その中から意外な情報を得ることもあります。さらに、一緒に議論をしてくれる学生や同僚・研究仲間や、資料の所在等について調べてくださるレファレンス・サービスの担当者の方などからの支援があっはじめて、自分の研究を学会報告や論文などの形で世に問うことが可能になっていると思います。

Q4. その他、学生の皆さんに論文を執筆する上で何かアドバイスをお願いいたします。

論文の書き方やその前提となる研究の進め方については、すでに優れた本が何冊も出版されています。これらをじっくりと読んでいただきたいと思います。まずは、戸田山和久 2002『論文の教室』（日本放送出版協会）を読んでみてはいかがでしょうか。

（きむら・くにひろ）

「情報検索の小径」シリーズは、本学における学術情報リテラシー教育支援の一環として、学内の先生方に情報検索に関する記事をご寄稿いただくものです。

# 平成19年度大学図書館職員長期研修参加報告

工学分館管理係 中 村 浩 子

7月2日(月)から7月13日(金)に筑波大学で行われた大学図書館職員長期研修に参加することができた。

講師陣の顔ぶれは、図書館学教授陣、大学図書館関係者、理系・文系の研究者、公立図書館関係者、書店員など多彩にわたっており、興味深い講義をしていただいた。その中から、印象の強かった講義などについて述べてみたい。

## 1. 理系研究者の学術情報アクセス

私が最も印象的だったのは、素粒子物理学研究者による「研究者のアクセス手法」という講義である。

それによると、素粒子物理学の世界では、e-print archive という論文収集・公開システムが構築され、そのサーバに研究者自身が論文をアップし、各国の研究者が自由に論文にアクセスできるという。

また、素粒子物理学では1970年代から、プレプリントなどを収集し、Spires とよばれるデータベースが構築されている。e-print archive にアップされた論文は、自動的に Spires にも取り込まれる仕組みだという。

素粒子物理学以外の分野でも、研究者間で独自の学術情報収集・公開システムを構築している可能性は高いであろう。図書館もデータベース等の研究支援環境を整えているが、実際に研究者がどんな学術情報システムを使っているか、学術テーマ別により細かく把握する必要があるのではないかと。

現在図書館界で話題の機関リポジトリについては、「研究者は(e-print archive と機関リポジトリの)二重に論文をアップロードする」ことになる問題点が指摘された。

## 2. 図書館員に求められる資質

大学組織の再編、予算と人員の削減、図書館

業務の外注化、電子ジャーナルなど資料費の高騰など、図書館をとりまく現状はたいへん厳しい。この難局を乗り切るために、これからの図書館員に求められる資質について、研修中しばしば話題になった。具体的には、企画力、PR力、問題解決能力などがあげられていたが、これらは社会人一般や企業人に求められるものと、全く同じだと思う。図書館界のみならず、他業界の実情を知る研修の必要性を感じた。

## 3. 班別討議

ほぼ毎日、午後の最後の時間は、班別討議に当てられた。参加者は7、8名ずつの班にわけられ、自分たちでテーマを決め、最終的には各々が企画書をまとめあげる。

資料費の確保、インフォメーションcommonsなどのテーマが比較的多く選ばれていた。いくつか、ユニークな企画を提示する。

- ・無料 ILL：所属教員の書いた論文への ILL の依頼は、無料で行う。論文をコピーさせてもらうと同時に、ファイルももらい、レポジトリに登録する。
- ・入学金の一定割合を図書購入費に充当する仕組みを作る。

## 4. 最後

この研修の一番の成果は、国公私立の枠を越えて、全国の図書館職員と交流できたことである。今後も、彼らといろいろな形で情報交換していきたい。

この研修を無事に終えたのは、主催者の筑波大学附属図書館、そして快く研修に送り出してくれた職場のみなさまのおかげである。改めてお礼を申し上げたい。

(なかむら・ひろこ)

## 平成19年度目録システム地域講習会(雑誌コース)を受講して

北青葉山分館管理係 工 藤 未 来

平成19年7月25日(水)~27日(金)の3日間、国立情報学研究所(NII)と東北大学附属図書館の共催により、本館2号館にて目録システム地域講習会(雑誌コース)が開催され、私も含め12名が本講習会を受講しました。

受講したメンバーは仙台市内のみならず石巻や福島からも集まっており、雑誌目録を担当するようになった人の他にも、今まで雑誌業務にあまり触れてこられなかったからという人や今後目録担当者となることを見据えた人など、それぞれの目的の為に講習会に臨みました。

私はと言えば、今年4月から雑誌受入業務と共に雑誌目録業務も担当しております。幸い前任の方が目録業務にも熱心に取り組んでこられた方だったため、引継ぎ時期に実際に書誌を修正する所を見せてくださったりと丁寧に教えていただくことができ、業務に入ってもマニュアルを参考にしつつ何とかこなしていくことができました。しかしそれだけではやはり、どこか無免許で自動車を運転するような心許無さもありません。そこで、今回の講習会で正式に目録システムについて学ぶことによってきちんと免許を取得しよう、という思いを持って講習会に臨みました。

3日間の講習会は目録システム概論から始まり、書誌検索に所蔵登録、書誌の作成や修正について、実習時間をふんだんに取りながら進められました。初日の懇親会では講師の方などから講義時とはまた違ったお話を聴くことができたのですが、そこで大きな話題となっていたのが、実際に書誌を作成したり修正したりする機会は少なくなっているということです。機会が少なく経験が積めない中でも、その少ない機会に触れた時にはしっかりと仕事をしなくてはなりません。そのためにも集中して学べるこの講習会は貴重な時間です。講習会の後半に入

ると実習時間だけでなく、時には休憩時間の合間に自習するなど皆さん真剣に受講していた姿が印象的でした。

また講習の最後には毎日セルフチェックテストというものも行われました。これは今年度から取り入れられたそうですが、簡単なテスト形式でその日の講義内容を確認するもので、自分が基礎的な知識をどこまで身に付けたのか把握する上で役立ったと思います。

さて、こうして3日間の講習会を終え、無事に「免許」を手に入れた私ですが、だからといって目録業務でつまづくことが無くなったかという、なかなかそう上手くはいきません。書誌情報の入力や修正を行う度に、いつもこれで本当に大丈夫か確認しながらの入力が続きます。もちろん書誌のための書式というのは決まっていますし、それをしっかり確認したことで以前のような心許無さは無くなったわけですが、情報源である雑誌本体からどのように情報を得ていくかという部分などでは、まだまだ悩んだり迷ったりしてしまうのです。

しかしこれは当然といえば当然のことなのでしょう。免許を取ったからといって、それで急に運転が上手くなるわけではありません。免許を取っても初心者は初心者。本当にスムーズに運転出来るようになるためには、まだまだ努力と経験が必要ということです。私も今しばらくは若葉マーク付きの運転が続きますが、早く本当の一人前になれるよう、これからも研鑽を積んでいきたいと思っております。

最後になりますが、講師の方々を受講の機会を与えてくださった関係者の皆様にご心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

(くどう・みらい)

## 平成19年度目録システム地域講習会(雑誌コース)を開催

平成19年7月25日から27日までの3日間、附属図書館本館において、平成19年度目録システム地域講習会(雑誌コース)を国立情報学研究所(NII)との共催で開催しました。

本講習会は、図書館職員を対象に、全国の大学図書館等が共同作成する総合目録データベース(NACISIS-CAT)に関する知識を習得し、目録情報の入力業務が行えるようになることを目的としたものです。

今年は、本学図書館のほか、宮城県内の公・私立大学図書館および公共図書館から計12名の参加がありました。また、講師陣として、NIIから派遣されたNPO法人「大学図書館支援機構」の高野真理子氏をはじめ、宮城教育大学図書館職員、本学図書館職員の講師6名および講師補助者7名が指導にあたりました。

カリキュラムは、「目録システム概論」「目録情報の基準」「目録検索」「所蔵登録」「書誌登録・修正」および実習、小テストなどで構成されています。

「目録システム概論」では、初めての試みとして、NIIが作成した「セルフラーニング教材」が導入されました。これは、受講生が各自のパソコン画面に向かい、ヘッドフォンから流れる解説を聞きながら、図解された動画を見て学習するものです。教材そのものについては概ね好評でしたが、限られた講習期間を有効に活用するため、予習教材として使用する方が望ましいとの意見も寄せられました。

実習では、テキストの例題通りには行かない課題の数々に悪戦苦闘しつつも、参考資料を確認したり、講師に質問するなどして、理解を深めていました。

講義・実習の合間に行われる3回のセルフチェックテストは、総じて高得点であり、講義内容がほぼ理解されていたようでした。

不慣れな環境の下で集中的に行われる講義に、最終日には多少疲れた様子も見られましたが、無事全員に修了証書が授与されました。

(情報管理課雑誌情報係)



セルフラーニングに取り組む受講生



高野講師による講義風景

## 「附属図書館オープンキャンパス2007」を開催

東北大学附属図書館では、全学のオープンキャンパス日程に合わせ、去る7月30日、31日の二日間オープンキャンパスを開催しました。

今年は東北大学全体でみても参加者が増加しており、附属図書館への来館者も昨年の2,456名を大きく上回る3,269名となりました。附属図書館本館では、毎年オープンキャンパス特別企画として、館内ツアーを実施しています。普段は入ることのできない地下書庫などを30分ほどで見学していただきます。今年は高校生の方々の参加ももちろんですが、保護者や教員の方々のご参加も多数あり、資料や利用に関する質問も高校生に劣らず活発に寄せられました。



また、全館企画として東北大学創立百周年に合わせ「絵葉書タイムトラベル」展を各館で同時に開催しました。この、本館と4分館で同時に同じ内容の資料展示（パネル展）を行う試みは2年前から実施しており、各キャンパスに分散している本館・分館が附属図書館としての一体感を出すことに一役買っています。オープンキャンパスの参加者は、希望する学部の見学スケジュールにより、特定のキャンパスのみ見学

する人が多いと思われませんが、どこを訪問してもそれぞれの図書館を訪れると参加者向けの展示を見学することができます。また、各分館においても館内ツアーなどを実施し、大学図書館を短時間で体感してもらう企画をそれぞれに実施しました。

参加した高校生等からは、「図書館のすごさに圧倒されました。こんな素晴らしい図書館を持つ東北大生は幸せ者だなあと感じました」、「すごい楽しかったです。図書館利用のためにがんばって合格したいと思います」、「来年、ここで大学院生活を送りたくなりました」などの感想が寄せられました。

今年は、展示してある絵葉書の中から2点を選び、レプリカとして製作の上、ツアー参加者に配布しました。レトロな感覚あふれる絵葉書は年齢を問わず好評でした。これらは当館が所蔵する資料のほんの一端ですが、研究対象資料としての興味を引くきっかけの一つになればと思います。



(総務課情報企画係)

## 平成18年度参考図書購入報告

参考図書費により平成18年度に購入し、本館レファレンス・コーナーに配置した参考図書のうち主な資料を下記のとおりお知らせします。

(情報管理課)

### ◇ 主な継続受入資料 ◇

Book page 本の年鑑 2006 1・2  
イミダス 2007  
会社四季報：2006年 3，4集  
会社四季報：2007年 1集  
会社職員録 全上場会社版 2007 上，下巻  
会社職員録 非上場会社版 2006 上，下巻  
近代雑誌目次文庫 社会学 第3・12巻  
現代用語の基礎知識 2007  
国語年鑑 2006年版  
国会便覧 2006/07 119・120  
雑誌新聞総かたろぐ 2006年版  
宗教年鑑 平成17年版/文化庁編  
世界国勢図会 2006/07/財団法人矢野恒太記念会編  
世界年鑑 2006  
世界文学あらすじ大事典 3  
全国学校総覧 2007  
全国短大・高専職員録 2006  
全国大学職員録 平成18年版 国公立大学編  
全国大学職員録 平成18年版 私立大学編  
台湾総督府文書目録 第20巻  
知恵蔵 - 朝日現代用語 - 2007  
中国書籍総目録 123・132  
中国年鑑 2006  
図書館年鑑 2006  
日本経済新聞 CD-ROM 版 2005年版  
日本国勢図会 第64版 2006/07  
日本の図書館 - 統計と名簿 - 2006  
美術年鑑 平成19年版  
ブリタニカ国際年鑑 2006年版  
読売年鑑 2007  
読売年鑑 2007 別冊 分野別人名録  
理科年表 第80冊 (2007)  
歴史学事典13  
六法全書 平成18年版 1，2，補遺

Althochdeutsche Wörterbuch Band. V  
American reference books annual 37 (2006)  
Britannica book of the year 2006  
Dizionario biografico degli italiani. 63-67  
Encyclopaedia Indica: India, Pakistan, Bangladesh. Vol.152-170  
The Encyclopaedia of Islam. New ed. Index Vol. Fas.2

The europa World Year Book 2006 Vol. 1-2  
The Europa world of learning 57th ed. 2007  
International Who's who 2007  
McGraw-Hill Yearbook of Science & Technology 2007  
Mittellateinisches Wörterbuch bis zum ausgehenden 13. Jahrhundert Band.3  
Study abroad 2006-2007 33rd ed  
The Statesman's year-book 2007  
Wer ist wer? : Das deutsche who's who Bd.45 2006/07  
Whitaker's Almanack 139th ed. 2007  
Who was who in America : with world notables 2005-2006 Vol.17  
Who's who 2007  
Who's who in America 2007. 61st ed. Vol.1-2  
Who's who in France 2006-2007  
The world almanac and book of facts 2007

◇ その他の主な受入資料 ◇

ノーベル賞受賞者業績事典 新訂版  
フリジア語辞典  
英米文学研究文献要覧 2000-2004  
外国地名レファレンス事典  
近世藩制・藩校大事典  
現代史図書目録 2000・2004  
現代日本文学 2000・2004 (日本文学研究文献要覧)  
現代倫理学事典  
古代オリエント事典  
古文書用語大辞典  
江戸鳥類大図鑑  
今昔文字鏡：単漢字15万字版  
最新スポーツ科学事典  
細胞生物学事典  
社会的選択と厚生経済学ハンドブック  
消費者問題文献目録 1975・2004  
情報システムのための情報技術辞典  
心のケアのためのカウンセリング大事典  
心理学総合事典  
世界の図書館百科  
世界芸術家辞典  
聖書植物大事典  
戦国人名辞典  
日本古代中世人名辞典  
日本語学研究事典  
日本女性文学大事典  
福祉文献大事典  
分子生物学大百科事典  
法則の辞典  
和歌・俳諧史人名事典

Encyclopaedia Judaica / Fred Skolnik, editor-in-chief; Michael Vol.1-22  
Lean's collectanea : encyclopedia of proverbs vol.1-4

## 「江戸の遊び～けっこう楽しいエコレジャー～」を巡る話題から(4)

## 遊ぶ楽しみ

情報管理課 図書館専門員 菊 地 房 雄  
 情報サービス課 閲覧第一係 代 田 有 紗

はじめに

平成18年度企画展「江戸の遊び～けっこう楽しいエコレジャー～」を巡る話題の第4回目は、「遊ぶ楽しみ」として、本企画展の第4部で取り上げた、囲碁、将棋、盤双六、絵双六、お参りについて紹介します。

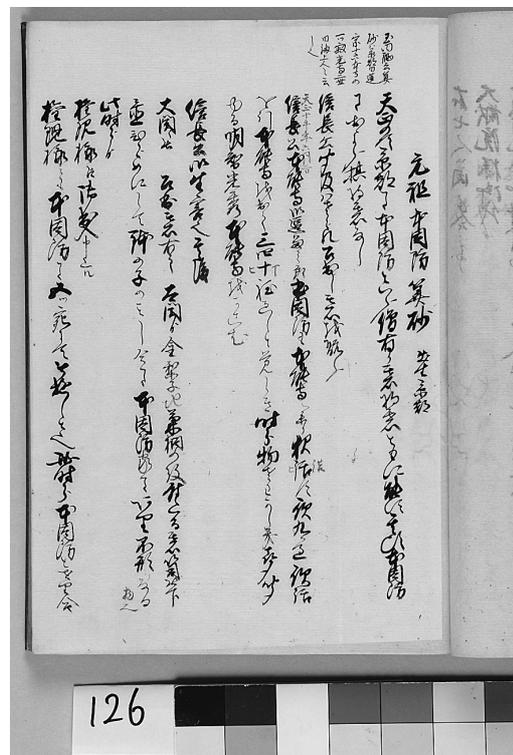
江戸時代に行われていた遊びは幅広く、室内遊戯から武術などの屋外スポーツ、音楽や演劇などの芸術的趣味や行楽などのレジャーまでさまざまありますが、第4部では、第1部から第3部までとの関係と、本館所蔵資料が内容的・数量的に展示資料としてふさわしいかどうかを検討した結果、庶民が親しんでいた遊びという観点から、囲碁、将棋、盤双六、絵双六、お参りに焦点を絞って取り上げることとしました。

## 1. 囲碁

信長や秀吉などの戦国大名は軍略的見地から囲碁・将棋を好み、しばしば禄を与えて上手衆の対局を開きました。家康も彼らを江戸へ呼び寄せ御前試合を行うなど、囲碁・将棋を奨励しました。その後、幕府は碁所や将棋所の制度を設置し、初代碁所には本因坊算砂が任命されました。碁所の役割は、御城碁の運営、将軍の指南、全国棋士の統一、免状の発行など、囲碁界の権威を一手に握った存在で、最高実力者である名人でなければなりません。家元制度が確立すると、名人=碁所は、本因坊家、安井家、井上家、林家の4家の中から選ばれることとなりました。各家元は、碁所をめざして真剣に技量を磨き、門人の養成にも努力したので、その水準は格段に向上して行きました。

この頃の状況を著した書物として、石井恕信撰、謙齋老人(源備)編の『国手伝記』天保2年(1831)が挙げられます。これは、元祖本因坊算砂から第十三代本因坊丈策までの時代の伝

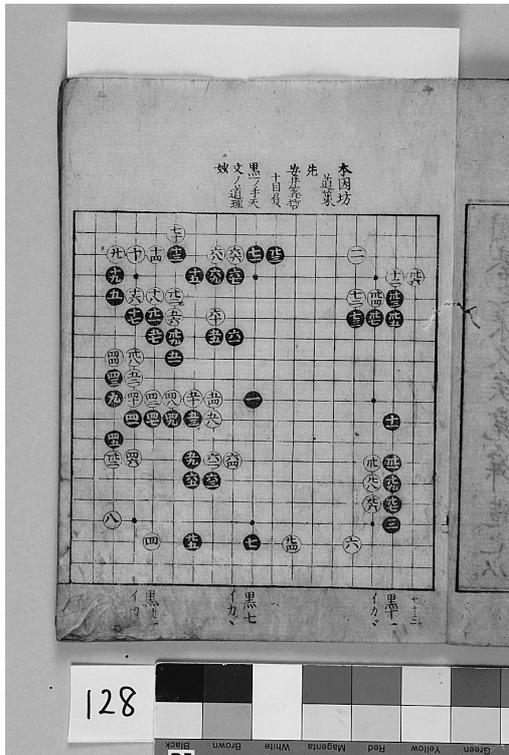
記集で、本因坊算砂の項では、算砂が本能寺を辞して間もなく「本能寺の変」が起こったこと、秀吉から金梨地菊桐紋の付いた碁笥を頂戴したこと、また、家康とは五子の手合いであったことが書かれています。



『国手伝記』

幕末まで200年以上も続いた御城碁や、名人碁所をめぐる囲碁4家の争いにおいて、江戸時代には数々の名勝負が生まれました。その結果、これらの名局を記録した書物も数多く出版されています。秋山仙朴(正廣)著の『古今當流新碁経』安永3年(1774)の冒頭に、史上最強、実力13段といわれる碁聖本因坊道策と、安井算哲の棋譜があります。算哲は、江戸時代中期の暦学者で、幕府の天文方を勤めた渋川春海です。驚くことに、算哲は初手を碁盤の中央(天元)に打ちました。評には「黒一の手 天文の道理、

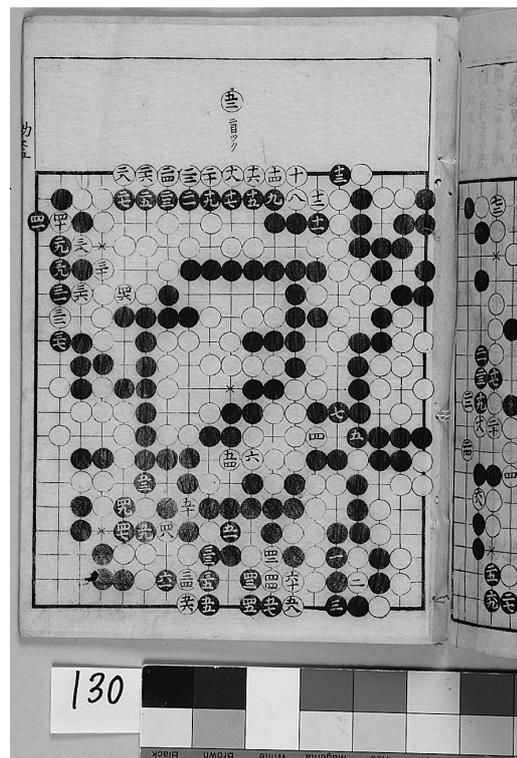
妙」とありますが、結果は10目負けに終わりました。これとは別の、御城碁での対局でも、算哲は道策に対し初手天元を試みましたが、その対局でも敗れ、以来、初手天元を打つことは無かったということです。



『古今當流新碁經』

文化文政期には、碁所をめぐる知謀・策略を懲らした暗闘が、囲碁4家を巻き込んで、盤上・盤外を問わず繰り広げられました。その中心人物である本因坊丈和の著した『国技観光』文政9年(1826)には、ライバル幻庵因碩(立徹、安節)との対局を載せています。書名中の「国技」は、わが国の囲碁が高いレベルに達したという表現で、また、最上級のものをみるという意味の「観光」を自著に冠したのは、みずから第一人者であるという自信の表れです。そんな宿敵の著作の中に、屈辱的な第1線のワタリを強いられて敗れた対局を載せられたことに対し、幻庵因碩は大変憤慨したということです。

家元4家のいわゆるプロ棋士たちは、アマチュアへの指導・普及にも力を入れ、初心者のための布石・定石や、置碁の打ち方を解説した入門書も盛んに出版されるようになりました。例えば、選亭京子撰、吐屑庵養拙校『碁立絹飾』



『国技観光』

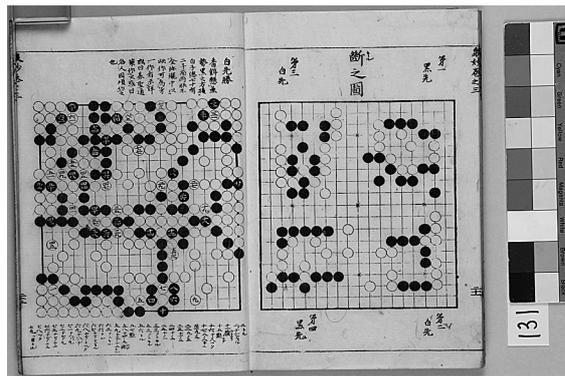
天明7年(1787)、玄玄齋主人編『圍碁定石集』寛政5年(1793)、服部因淑著『繹貴奕範』文化6年(1809)、玄々齋主人編『碁経玉田鋤』文化7年(1810)などが挙げられます。ただし、置碁に関していえば、これらの書物で解説されているのは互先から六子局まででした。このことに着目した服部因淑は、『置碁自在』文政7年(1824)において、九目までの部分を変化図・解説付きで書き加え、この結果、置碁教科書は、彼によって集大成されたのです。



『置碁自在』

詰碁は、囲碁の死活を独立させたもので、中国では古くから『玄玄碁経』や『官子譜』など

で取り上げられています。日本では河北鳴平が、『玄玄碁経』を改編した和刻本『寛永版玄玄碁経』を、定石、死活、詰碁について解釈を付けて、『玄玄碁経偶諺鈔』宝暦3年(1753)としてまとめています。わが国最初の本格的な詰碁の書物は、井上道節因碩著の『囲碁発陽論』正徳3年(1713)とされています。しかし、内容が難解・高度な、この井上家秘伝書は、門外不出により世の中に流布することはありませんでした。それに対して、船橋元美(林元美)の『碁経衆妙』文化9年(1812)は一般向けの詰碁・基本手筋集で、その中には「香餌懸魚之勢」という、72子を取ってもなお生きないという不思議な詰碁傑作があります。彼は更に続編として『碁経精妙』天保6年(1835)を著し、詰碁など合計287題を掲げていますが、ヨセ手筋の紹介は本書がはじめてということです。



『碁経衆妙』

## 2. 将棋

家康は囲碁・将棋を愛好し、碁所や将棋所の制度を設けて録を与えました。最初は本因坊算砂がその両方を勤めていましたが、後に将棋所は独立して、大橋宗桂が初代将棋所になりました。その後、囲碁同様、家元制度が確立すると、最高権威の将棋所を目指して、大橋本家、大橋分家、伊藤家の3家が互いに切磋琢磨し研鑽を積み重ねた結果、その実力は次第に高水準のものとなって行きました。

将棋所の役割として、全国棋士の統一や免許の発行がありますが、享保2年(1717)に著された『将棋図彙考鑑』には、元祖大橋宗桂から六代伊藤宗印までの将棋所と、こうして格付け

された諸国の七段から初段までの名簿が掲載されています。また、大橋宗桂対本因坊算砂(勝ち)を含む、実戦譜91局も収載されています。

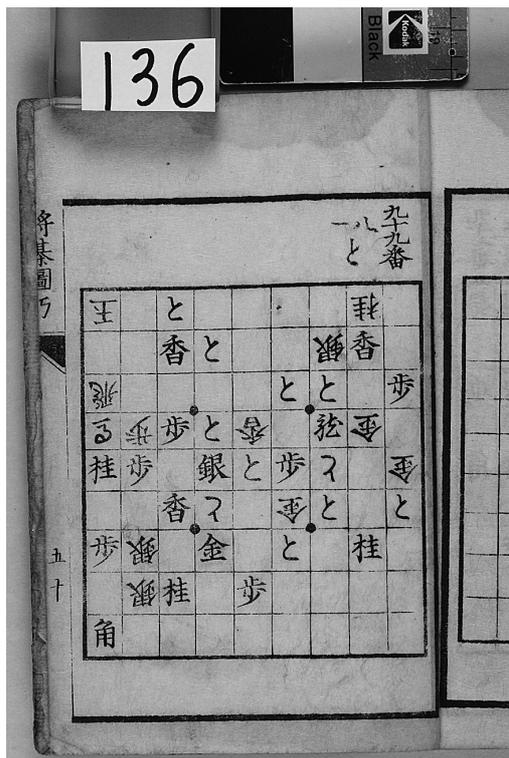
やがて江戸後期になるにつれ、棋士に対する豪商・豪農の後援や、出版の発達によって、将棋は庶民の間に大いに普及して行き、この間、さまざまな将棋入門書が発行されました。天野宗歩の『将碁精選』嘉永6年(1853)は、大橋宗英の『将棋歩式』文化7年(1810)や福島順喜の『将棋絹篩』文化元年(1804)とともに三大定跡書と称されますが、その頃まだ数少なかった駒落ち定跡書という意味でも重要です。



『将碁精選』

さて、初代大橋宗桂が創作詰将棋を幕府に献上したことで、以後、歴代名人の襲位時にはそれが慣例となり、詰将棋は、実戦の指し将棋とはまた別のジャンルとして発展し、極めて高度で芸術的な作品が発表されるようになります。伊藤看寿が宝暦5年(1755)に著した『将棋図巧』は、献上詰将棋の作品集で、多くの傑作が収められています。特に、第98番「裸王」(初期状態で盤面に王将1枚だけが配置されている)、第99番「煙詰」(盤上の全駒39枚が局面が進むにつれて消失し、結局最低条件の駒3枚で詰む)、第100番「寿」(611手の長手数詰)などが有名です。本書は、兄の三代伊藤宗看が著した『将棋無双』と並んで、江戸時代における詰将棋の最高峰といわれています。

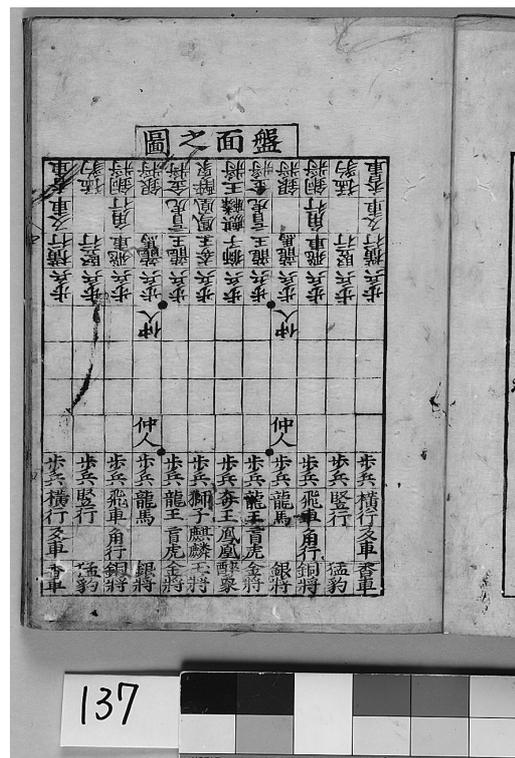
添田宗太夫著の『象戯秘曲集』は、あがり出し詰将棋を集めた作品集で、初版は宝暦2年(1752)に出版されました。あがり出しとは、詰め上がりの駒の配置によって文字や模様が現れるもので、本書には、さまざまな文字や形の



『将棋図巧』

作品が収められています。中でも第82番の「平窓」は、初期状態と詰め上がりの両方で窓が開く様を表している、表裏曲詰として名高いものです。しかし、九世名人大橋宗英の時に、実戦に集中することを理由に、みずから詰将棋献上を廃止したため、詰将棋は急速に衰微し、ふたたび盛んになるのは昭和になってからのことでした。

将棋が、いわゆる「本将棋」に落ち着く江戸時代初期には、他にも、盤の広さや駒の種類・数が様々な将棋がありました。そのうちの最大のもは「泰将棋」(盤面25×25、駒数354枚)ですが、それらのほとんどは、取った駒の再使用はできません。『中将碁詰物指南』元禄16年(1703)は中将棋のルールと定跡の解説、加えて詰将棋を載せています。中将棋には「獅子」,「麒麟」,「鳳凰」など、本将棋にはないいろいろな駒があります。なかでも「酔象」は敵陣に入ると「王」と同格の「太子」に成るので、その時は「王」と「太子」の両方を詰めなければ勝ちになりません。従って、中将棋では本当に相手の「王」を取ることが出来るのです。



『中将碁詰物指南』

### 3. 盤双六

盤双六は、12の枡目が2列に並んだ盤と白黒各々15箇の駒を用い、二人が交互に2箇のさいころを振って、出た目の数だけ駒を進めて行くゲームですが、お互いに自分が有利になるよう、相手の駒を取り除いて邪魔をしたり、牽制したりすることが出来るので、複雑で頭脳的なゲームとなっています。普通は、このような「本双六」というルールで行われますが、その他に、大和、折葉、追い回し、柳という遊び方もあります。盤双六は、碁・将棋とあわせて三面と呼ばれ、江戸時代には、婦人のたしなみとして結

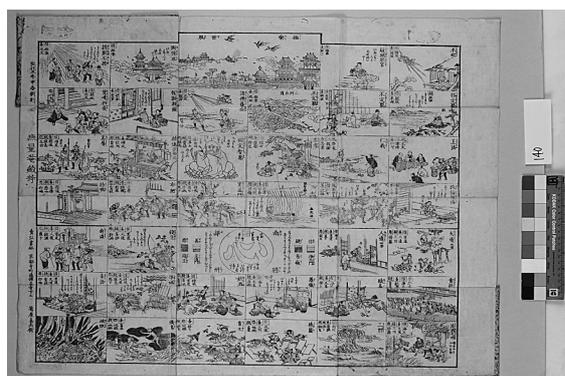


『雙六獨稽古』

婚調度品の一つになっていましたが、あまりにも賭博化の傾向が強いため、幕府からしばしば禁止令が出されて、次第に衰微して行きました。大原芳蔵（菊雄）は『雙六獨稽古』文化8年（1811）で、初心者向けに、盤双六の競技方法や礼儀作法を、その続編の『当流妙手雙陸錦囊抄』文化8年（1811）で、上級者用の定石や高等戦術について解説しています。

#### 4．絵双六

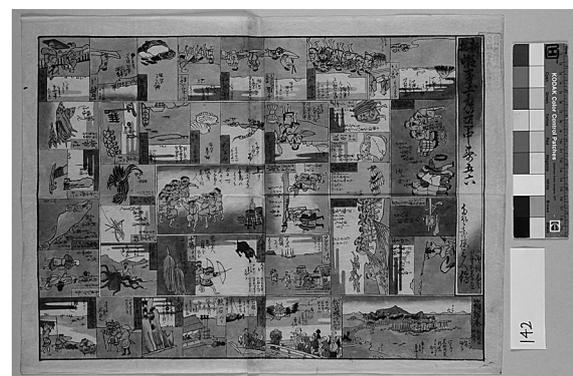
絵双六は、紙上の区画（枡）をたどり、コマや札を振り出しから上がりまで進める、多人数で行う遊戯で、その始まりは、新米の僧に仏法の名目を教えるための、仏法双六といわれています。仏法双六には絵はありませんでしたが、江戸時代に入って成立した浄土双六には、絵が描かれるようになりました。そのひとつである『善悪雙六極楽道中圖繪』弘化5年（1848）の各枡には、挿絵の他に教訓めいた歌も記されており、仏教の教えを守り努力するほど極楽に近づけるという配置になっています。コマの進め方は、引いた籤の黒白の組み合わせによりますが、振り出しに戻ったり、地獄に堕ちて途中棄権などのルールがあります。



『善悪雙六極楽道中圖繪』

絵双六の発展は、江戸中期になると多色刷木版印刷の進歩によって拍車がかかり、浄土双六のみならず、官位、名所、道中、役者、遊芸、合戦など、多種多様な主題・内容を題材としたものが刊行されて、急速に庶民に広まって行きました。『新板官職雙六指南』宝暦7年（1757）は振り出しを庁（まんどころ）、上がりを執柄（摂政関白）としたもので、紙面上部の枡ほど

高級職階となるよう配置されています。浄土双六同様、籤の結果によりコマを進めて行きますが、行く先には転任、昇進待機、停職、辞職勧告など、現代のサラリーマンにも相通じる関門が待ち構えているのです。また、旅行案内の性格も持ち合わせた道中双六は、東海道五十三次やお伊勢参りなどの旅ブームと相俟って大いに流行しました。北海道をテーマとした『蝦夷土産道中双六』は幕末の作品ですが、その美しい彩色表現を目にすると、本当に船旅をしているような気分になります。



『蝦夷土産道中双六』

絵双六をコマの進み方でみると、枡の順に進む廻り双六と、枡中の指示により他の枡へ移動する飛び双六の二つがあり、飛び双六の方が多く見られます。廻り双六の代表は道中双六で、振り出しから渦巻き状に中心の上がりを目指すため、紙上の絵は端から見て中心に向かって描かれています。また、両者混合の振り分け双六もあります。

#### 5．お参り

江戸初期、旅をしていたのは武士や商人、巡礼者などであり、物見遊山の旅をするものはほとんどいませんでした。江戸時代後期、幕府が参勤交代を制度化し、江戸と国元との往来が可能ないように街道や宿場が整備されると、次第に庶民も旅に出るようになりました。また、印刷技術の発達によって出版業が盛んになると、次々と旅行案内書が出版され、その中でも大ヒットした『東海道中膝栗毛』や各地の名所旧跡を絵で紹介した「名所図会」が、さらに庶民の旅ブームに拍車をかけたと言えます。『都名所図

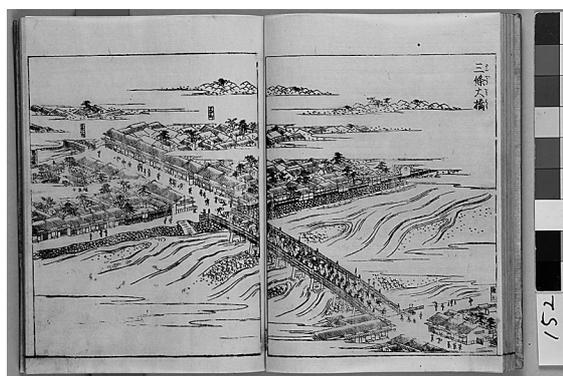
会』安永9年(1780)は、これまで違った視点、スケールの名所案内物として大名の間で大人気となり非常によく売れ、これがきっかけとなり各地の「名所図会」が出版されるようになりました。また、当時の旅人のバイブル的存在となっていたのが『旅行用心集』文化7年(1810)で、「道中用心61ヶ条」として旅に出る際の必要最小限の心得と用心を紹介しています。

江戸時代は全国50ヶ所あまりの地に関所が設けられており、そこを通過するには現在のパスポートにあたる「関所手形」といわれる旅行証明書が必要でした。その証明書をもらうためには遊びに行くというような理由ではなく、神社仏閣に出かけお参りをするということが非常に都合良かったため、物見遊山を兼ねた参詣の旅というのが当時の主流となっていました。また経費がかさむ遠方への旅は、「講」を結成し、講の構成者で旅費を積み立て、くじ引きなどで選ばれた代表者2~3人が積立金を持って参詣するという形でも行われていました。しかし講に参加できるのは家父長に限られていたため、妻子や奉公人はなかなか旅に出ることができませんでした。

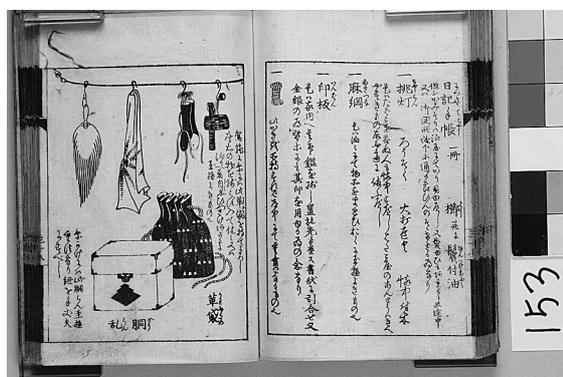
「一生に一度はお伊勢参り」と言われるほど一番人気だったのが伊勢神宮への参詣でした。こういった風潮が一般的になったのは、御師と呼ばれる人が全国各地へ出向き伊勢の信仰を広げたためと言われています。庶民にとって伊勢などの遠隔地への旅は生涯に一度か二度あるかないかのチャンスだったので、各地の神社仏閣・名所旧跡を訪ねながら往復2ヶ月くらいかけて楽しみました。京都三条大橋から伊勢までの各地の名所旧跡を紹介したガイドブックとして『伊勢参宮名所図会』寛政9年(1797)があります。また、この伊勢参りには普段旅に出ることができない妻子や奉公人も「お蔭参り・抜け参り」という方法で旅に出ました。関所手形もお金も持たずに親やご主人に無断で伊勢へ向かい、その道中で豊かな家の人に着物や履物などの旅支度を恵んでもらったり、宿泊の世話をしてもらいながら旅をしました。遷宮のあった翌年にお参りすると神のお蔭をこうむると言われたため、この「お蔭参り・抜け参り」は50~60

年周期で起き、200~300万人が伊勢へ参詣しました。

近場の旅として江戸庶民に人気があったのは、成田詣でや江の島詣でした。それぞれの名所・名物を紹介したものとして『成田参詣記』安政5年(1858)や『江の島まうで浜のさざ波』天保10年(1839)があります。また、宮城県的神社仏閣・名所旧跡を紹介したガイドブックとしては、『金華山詣』文政8年(1825)、『塩がま詣』文政8年(1825)、『竹駒詣』文政5年(1822)があります。



『都名所図会』



『旅行用心集』

おわりに

絵双六は、観覧者の多くが経験があるようで、それなりの反響がありましたが、囲碁や将棋はルールを知らない方には興味も湧かないという状況でした。また、詰碁、詰将棋の展示のそばには、碁盤、碁石などを準備しておけば、理解の手助けとなったことでしょう。「実際に手にとって、次のページも見てみたい。」という要望には課題が残りましたが、総長が「江戸時代も将棋倒しをやっていたのですね。」と言われ

たように、遊びの様子をパネル展示したのは効果的だったようです。

(きくち・ふさお, しろた・ありさ)

主要参考文献(第4部)

1. 増川宏一『盤上遊戯』(ものと人間の文化史29) 法政大学出版会, 1978.7
2. 増川宏一『遊芸師の誕生 - 碁打ち・将棋指しの中世史』(平凡社選書111) 平凡社, 1987.9
3. 林裕総編集『日本囲碁大系』1 18, 筑摩書房, 1975.4 1977.8
4. 林元美[著]・林裕校注『爛柯堂棋話 - 昔の碁打ちの物語』1 2(東洋文庫332, 334) 平凡社, 1978.6 1978.7
5. 中山典之『囲碁の世界』(岩波新書) 岩波書店, 1986.6
6. 福井正明監修「碁界黄金の十九世紀」1 30(『月刊碁ワールド』49(8 13), 50(1 5, 7 13), 51(1 5, 7 13), 2002 2004)
7. 水口藤雄「徳川家康の囲碁物語」1 12(『月刊碁ワールド』51(1 5, 7 13), 2004)
8. 伊藤宗看・看寿[著]・門脇芳雄解説『詰むや詰まざるや - 将棋無双, 将棋図巧』(東洋文庫282) 平凡社, 1975.12
9. 門脇芳雄解説『続詰むや詰まざるや - 古典詰将棋の系譜』(東洋文庫335) 平凡社, 1978.7
10. 増川宏一『将棋 [ 1 ]』(ものと人間の文化史 23(1)) 法政大学出版局, 1977.11
11. 増川宏一『すごろく』 (ものと人間の文化史79 1, 2) 法政大学出版局, 1995.7
12. 加藤康子・松村倫子『幕末・明治の絵双六』国書刊行会, 2002.2
13. 藤谷俊雄『「おかげまいり」と「ええじゃないか」』岩波書店, 1968.5
14. 佐々木俊介『大江戸万華鏡』(人づくり風土記: 全国の伝承江戸時代: 聞き書きによる知恵シリーズ) 農山漁村文化協会, 1991.12
15. 西山松之助『江戸庶民の四季』岩波書店, 1993.3
16. 小泉吉永『往来物解題辞典』大空社, 2001.3
17. 金森敦子『関所抜け江戸の女たちの冒険』晶文社, 2001.8
18. 池上真由美『江戸庶民の信仰と行楽』同成社, 2002.4

19. 旅の文化研究所編『絵図に見る伊勢参り』河出書房新社, 2002.10
20. 神崎宣武『江戸の旅文化』岩波書店, 2004.3.

## 東北大学創立100周年記念展示

「東北大学の至宝 - 資料が語る1世紀 - 」開催中

本年は東北大学創立100周年にあたります。これを記念した展示会「東北大学の至宝 - 資料が語る1世紀 - 」を、東京都江戸東京博物館と仙台市博物館で開催します。附属図書館はこの展示会の準備と運営に総力を挙げて取り組んでいるところです。あらゆる分野の資料を一堂に集めたこと、さらに大学キャンパスを離れて東京で開催することは、本学にとっても初めての試みとなります。現在、江戸東京博物館での展示が無事開会し、初日からの10日間で約一万人の入場者がありました。100年に一度のこの機会、是非足を運んでいただければ幸いです。ここでは両展示会の概要をご紹介します。



江戸東京博物館開会式後の内覧会

### 開催概要(1)

会場：東京都江戸東京博物館  
5階第2企画展示室

開催期間：平成19年9月1日(土)~  
平成19年10月14日(日)

休館日：9月3日・25日・10月9日

主催：東京都、東京都江戸東京博物館、  
東北大学、財団法人東北大学研究  
教育振興財団

### 開催概要(2)

会場：仙台市博物館

開催期間：平成19年11月2日(金)~  
平成19年12月9日(日)

休館日：毎週月曜日

主催：東北大学、仙台市博物館、財団法人東北大学研究教育振興財団

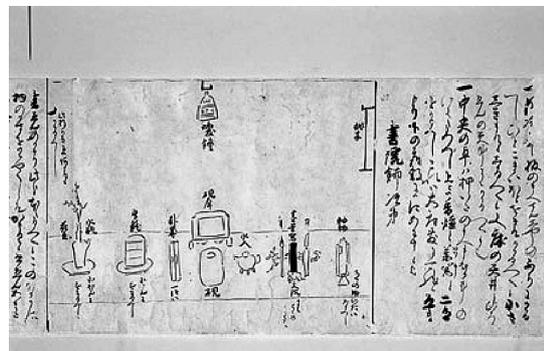
### 展示構成と主な展示資料

[プロローグ：東北大学の原風景]



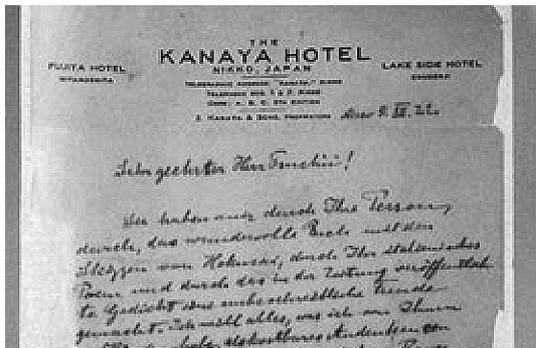
写真：旧東北帝国大学附属図書館  
(1911年(明治44年)竣工)

[第1部：狩野文庫]



君台観左右帳記  
(室町時代の会所における掛物・器物等  
による座敷飾の規式書)

[ 第 2 部 : 阿部次郎・小宮豊隆と仙台 ]



アインシュタイン書簡

(アインシュタインが第二高等学校教授の  
土井晩翠へ送った書簡)

[ 第 5 部 : 赤煉瓦書庫 ]



遮光器土偶

(左側は宮城県沼津遺跡。右側は秋田県藤株遺跡)

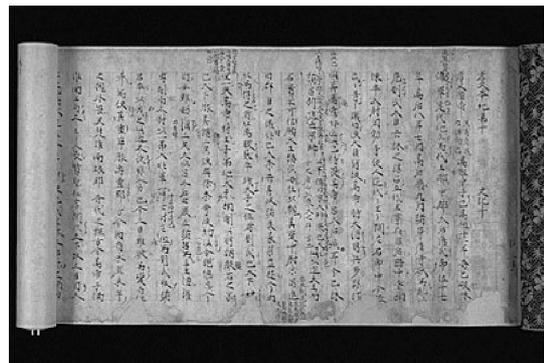
[ 第 3 部 : 図書館 - 文化の迷宮 - ]



臨顧愷之女史箴図巻

(日本画家の小林古徑と前田青邨が大英  
博物館の画卷を臨摸した作品)

[ 第 6 部 : 国宝 ]



史記 卷十 孝文本紀

(延久5年(1073)大江家国写 国宝)

[ 第 4 部 : 奥羽史料調査部 ]



安東愛季肖像

(日本国北方世界に君臨した戦国大名)



木造菩薩像

(ネパールカトマンドゥ・ボードナート大塔  
河口慧海請来)

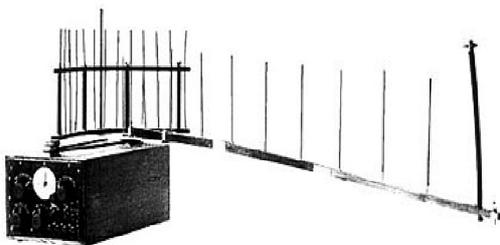
[ 第 8 部：標本庫 - 世界に誇るコレクション - ]



白亜紀アンモナイト

( *Parapachydiscus ( Neopachydiscus ) intermedius*  
Yabe and Shimizu )

[ 第 9 部：研究第一主義の系譜 ]



八木・宇田アンテナ

(日本の十大発明の一つに数えられ、世界で広く  
利用されている)

関連行事：江戸東京博物館（ 1 ）

「えどはくカルチャー」

( 記念講演会：申込制 / 有料 )



○ 9 / 2 ( 日 ) 「独創のすすめ - 未来を拓く科学  
教育 - 」西澤潤一 ( 首都大学東京 学長 )

○ 9 / 9 ( 日 ) 「藤森建築と芝棟」藤森照信 ( 東  
京大学生産技術研究所 教授 )

○ 9 / 16 ( 日 ) 「科学と小説と夢見る力 - 東北大  
学機械系研究室から - 」瀬名秀明 ( 作家，  
東北大学機械系 特任教授 )

○ 9 / 23 ( 日 ) 「河口慧海ヒマラヤを行く - 日記  
とコレクションから見る『チベット旅行記』  
の世界 - 」奥山直司 ( 高野山大学文学部密  
教学科 教授 )

○ 9 / 30 ( 日 ) 「脳を鍛えよう！ - 脳科学者から  
のメッセージ - 」川島隆太 ( 東北大学加齢  
医学研究所 教授 )

関連行事：江戸東京博物館（ 2 ）

「フロアレクチャー」

( 展示説明会：参加自由 / 無料 )



○ 9 / 1 ( 土 ) 「学都」永田英明 ( 東北大学学術  
資源研究公開センター史料館助教 )

○ 9 / 8 ( 土 ) 「図書館」曾根原理 ( 東北大学学  
術資源公開センター史料館助教 )

○ 9 / 15 ( 土 ) 「今も昔も手書きの世界」磯部彰  
( 東北大学東北アジア研究センター教授 )

○ 9 / 22 ( 土 ) 「東北大学の古文書」柳原敏昭 ( 東  
北大学大学院文学研究科准教授 )

○ 9 / 29 ( 土 ) 「チベット - 河口慧海と多田等観  
請来品の世界 - 」長岡龍作 ( 東北大学大学  
院文学研究科教授 )

○ 10 / 6 ( 土 ) 「赤煉瓦書庫」柳田俊雄 ( 東北大  
学学術資源研究公開センター総合学術博物館  
教授 )

○ 10 / 13 ( 土 ) 「標本庫，研究第一主義の系譜」  
永広昌之 ( 東北大学学術資源研究公開セン

ター総合学術博物館館長・教授)

関連行事：仙台市博物館(1)

「記念講演会」

(申込制/無料)

○11/3(日)「地域と歩む東北大学」井上明久  
(東北大学 総長)

○11/23(金)「科学の魅力 - 数学の魅力 - 」  
小谷元子(東北大学大学院理学研究科 教授)

○11/24(土)「遺伝子を働かせて脳を動かす！」  
大隅典子(東北大学大学院医学系研究科 教授)

○11/25(日)「江戸文化を語る - 狩野文庫の魅力 - 」竹内誠(東京都江戸東京博物館 館長)

関連行事：仙台市博物館(2)

「ミュージアムトーク」

(展示説明会：申込制/無料)

○11/10(土)「知る人ぞ知る狩野文庫 - 国宝からマツチラベルまで - 」曾根原理

○11/10(土)「わが図書館は日本の敦煌 - 宝島それとも夢の島? - 」磯部 彰

○11/17(土)「いにしえ人の声を聞く - 東北大学の古文書 - 」柳原敏昭

○11/17(土)「チベット - 河口慧海と多田等観請来品の世界 - 」長岡龍作

○12/1(土)「縄文の華・亀ヶ岡文化の工芸品」  
柳田俊雄

○12/1(土)「東北日本はアンモナイトの宝庫 - 東北大学のアンモナイト研究100年 - 」永  
広昌之

記念イベント：仙台市博物館

○「東北大学テクノワンダーランドへようこそ！ - 体験と展示 - 」(東北大学における  
金属・材料研究/我が国の情報通信における  
東北大学電気通信研究所の歴史)

・展示：11/2(金)~11/5(木)

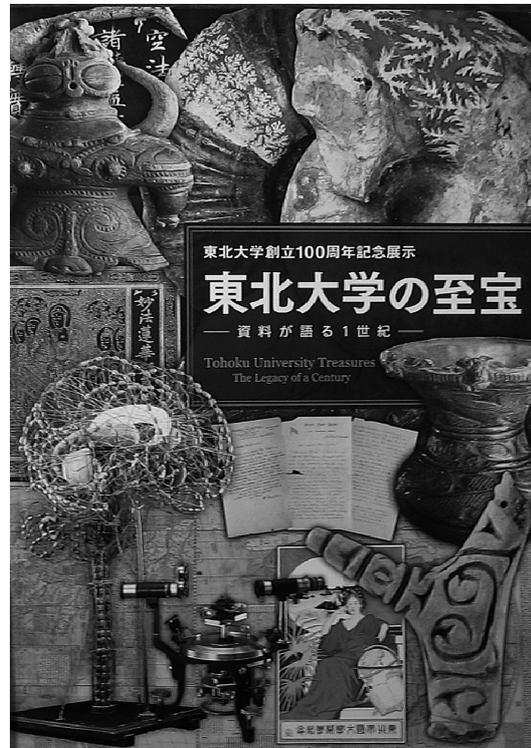
・体験：11/3(土)~11/4(日)

○「サイエンスエンジェルの体験科学ひろば@  
仙台市博物館」

・11/23(金)~11/24(土)

○「絵葉書タイムトラベル - 狩野文庫絵葉書  
コレクションから - 」

・11/2(金)~12/9(日)



解説図録

(展示会場で会期中限定販売)

問合せ先：

附属図書館情報サービス課閲覧第二係

東北大学創立100周年記念・朝日新聞入社100年・江戸東京博物館開館15周年記念

## 「文豪・夏目漱石 - そのころとまなざし」開催中

東北大学創立100周年を記念した展示会、「文豪・夏目漱石 - そのころとまなざし」を、東京都江戸東京博物館で開催中です。

この展示会では、本学附属図書館が所蔵する「漱石文庫」の資料を中心に、漱石の生い立ちから文学者としての歩みを、総展示資料800点余りという規模で紹介しています。

慶応3年（1867）江戸時代の末期に生まれ、明治日本という激動の時代を真摯に駆け抜けた夏目漱石。日本と西洋、個人と社会、自己と他者との問題に葛藤しつつ、しかしそれらを誠実に問いつづけた漱石の作品と生涯は、現代に生きる私たちにとってもなお、大きな指針でありつづけています。

この展示会を通じて多くの方々に、漱石のこのころの軌跡とそのまなざしのありかを感じ取っていただければと思います。

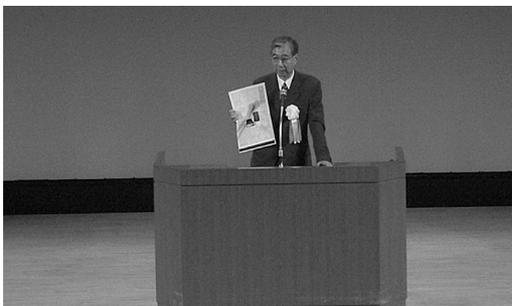
### 開催概要

会場：東京都江戸東京博物館 1階展示室

開催期間：平成19年9月26日（水）  
～平成19年11月18日（日）

休館日：毎週月曜（ただし、10月1日、10月8日は閉館。10月9日は休館）

主催：財団法人東京都歴史文化財団、東京都江戸東京博物館、東北大学、朝日新聞社



開会式であいさつをする野家啓一附属図書館長  
手には明治40年6月23日付けの『大阪朝日新聞』。東北帝国大学設置の勅令と漱石朝日新聞入社後の第1作『虞美人草』の第1回が隣り合って掲載された

### 展示紹介



漱石人形がお出迎え

漱石の声の再現による熊本第五高等学校創立10周年教員総代祝辞の朗読も

### [ 1章：誕生から大学卒業まで ]



漱石と米山保三郎天然居士

第一中学校時代の友人・米山保三郎と漱石。米山が漱石に贈った英語の小説 "Night & Morning" や "Paul Clifford" (いずれも漱石文庫蔵) などを紹介。米山の進言により漱石は英文学を志した。米山は「天然居士」の名で『吾輩は猫である』中で言及



漱石と正岡子規の友情

はじめて「漱石」と号した『七草集』（漱石文庫蔵）や、親友・正岡子規に宛てた書簡など、漱石と子規の友情を紹介。二人は共通の趣味である寄席の話題を通じて親しくなった



漱石が愛した画家たち

漱石は美術にも造詣が深く、小説や批評の中でたびたび画家や作品に言及した。漱石文庫の中から、漱石が愛した画家、ジャン＝バティスト・グルーズや、ダンテ・ガブリエル・ロセッティをはじめとするラファエル前派などを紹介

[ 2章：松山・熊本～ロンドン時代 ]



漱石と妻・鏡子

結婚式の次第を記した資料などを紹介



漱石がイギリス留学中に購入した蔵書

漱石が留学中に購入した図書約500冊のうち約400冊を一挙紹介（すべて漱石文庫蔵）。内容は文学から哲学、美術、科学など幅広いジャンルに及ぶ。漱石の留学中の学問的関心の所在を示す重要な資料。今回の展示会の目玉の一つ



イギリス留学中の漱石

漱石文庫の資料の中から、イギリス留学中の生活や思いを綴った「渡航日記」や「滞英日記」、さらに留学中の研究成果を示すノートや、蔵書への書き込み、妻・鏡子に送った書簡などを紹介



正岡子規の死

正岡子規は、結核から転移した脊椎カリエスによって、漱石がイギリス留学中の明治35年（1902）9月19日に逝去した。子規がイギリスの漱石に宛てて送った最後の手紙、「僕ハモータメニナツテシマツタ、毎日訳モナク号泣シテルヤウナ次第ダ……」などを展示

[ 3章：帰国・創作開始 ]



『吾輩は猫である』原稿

イギリス留学から帰国した漱石は、東京帝国大学で英文学を教えるかたわら、『吾輩を猫である』などの小説を発表、作品は大好評となり、次第に作家として立つことを思い定めるようになる。『猫』の序文（漱石文庫蔵）、第9章原稿などを紹介



漱石初版本の展示

高くても売れなくてもいいから綺麗な本を作りたい - - 凝り性の漱石は本の装幀にも心を配った。漱石作品の初版本は芸術品としても名高い（漱石文庫蔵）



漱石の本を手がけた画家たち

浅井忠や中村不折、橋口五葉など、当代の有名・新進気鋭の画家たちが漱石の本の装幀を手がけ、作品を彩った

[ 4章：漱石が描いた明治東京 ]



朝日新聞入社資料

明治40年（1907）、漱石はすべての教職を辞し、小説家として立つことを決意、朝日新聞社に小説記者として入社した。待遇をめぐる、朝日新聞社との交渉を示す書簡などを展示



『三四郎』と明治の学生生活

博覧会の模様や学生生活、政治家の汚職事件や伊藤博文の暗殺、明治天皇の死など、漱石は明治の風俗・社会を巧みに小説の中に取り込んだ

[ 5章：漱石山房の日々 ]



岡本一平「漱石八態」

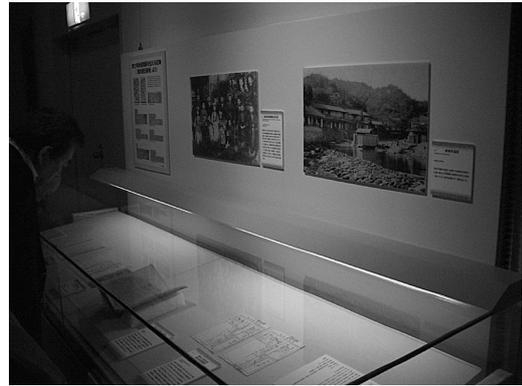
画家・岡本一平による「漱石八態」。漱石の生涯のそれぞれの時期を8つの絵で表したもの

[ 6章：晩年 ]



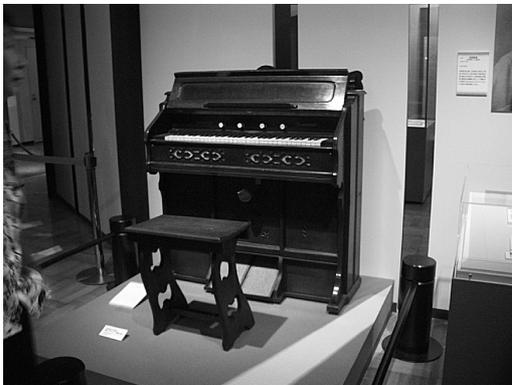
漱石の着物

漱石が愛用した羽織や襦袢，袴なども展示



修善寺の大患

明治43年（1910）8月，漱石は療養先の伊豆修善寺で大吐血をし，一時，人事不省の危篤状態に陥る。その前後の期間に綴っていた「修善寺大患日記」（漱石文庫蔵）や，漱石の危篤を伝える電報などを展示



寺田寅彦から預かったオルガン

明治42年（1909），ヨーロッパへ留学する寺田寅彦が漱石に預けたオルガン



『こゝろ』装幀原画

明治天皇の死去とそれに続く乃木大将の自殺など，明治の終焉をモチーフの一つとした『こゝろ』は，大正3年4月から8月まで朝日新聞に連載された。岩波書店から単行本の刊行にあたって，漱石は自分で装幀を考案した



漱石晩年の日本画・南画

晩年の漱石は日本画・南画の制作にも打ち込んだ。「山上有山図」「煙波縹渺図」などを展示



石鼓文

「石鼓文」は中国最古の刻石で，漱石は単行本『こゝろ』の表紙として用いた（漱石文庫蔵）



『明暗』反故原稿

『明暗』は、大正5年(1916)5月から12月まで、朝日新聞に連載され、漱石の死により未完のまま残された



漱石の死

大正5年11月22日、『明暗』執筆中の漱石は文机に倒れ、病床に就く。その後、二度と起き上がることがないまま、12月9日に亡くなった。享年49歳、変貌する日本とその中で生きる個人のこころを誠実に見つめ続けた生涯だった

関連行事：特別展「文豪・夏目漱石 - そのこころとまなざし」関連講座(申込制/有料)

- 10/21(日)「展覧会のみどころ1」橋本由起子(江戸東京博物館 学芸員)
- 10/27(土)「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり - 漱石・聖書・『三四郎』」仁平道明(東北大学大学院文学研究科 教授)
- 10/27(日)「漱石はホントに英語がよく読めたの?」富山太佳夫(青山学院大学 教授)
- 11/10(日)「展覧会のみどころ2」金子未佳(江戸東京博物館 学芸員)

○10/12(金), 19(金)「漱石文学散歩『彼岸過迄』を歩く」

申込み等詳細は、江戸東京博物館ホームページ(<http://www.edo-tokyo-museum.or.jp/>)をご参照ください。

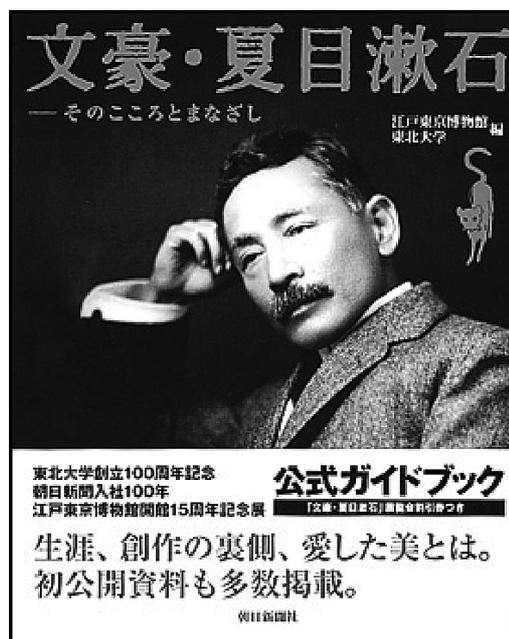
関連行事：講演会等

(申込制/有料)

- 10/6(土)コンサート「文明開化のクラシック」すみだ弦楽四重奏団
- 10/6(土)「漱石の言葉」夏目房之介(マンガ・コラムニスト)
- 10/13(土)「祖父漱石のこと」半藤未利子(随筆家)

申込み等詳細は、「文豪・夏目漱石 - そのこころとまなざし」公式ホームページ

(<http://www.asahi.com/soseki/index.html>)をご参照ください。



公式ガイドブック

『文豪・夏目漱石 - そのこころとまなざし』  
(朝日新聞社, 2007年9月刊)

B5 変型版, 144ページ, 税込み1,680円  
展示会会場, 全国書店で販売中

## 会 議

### 学 外

#### 第62回東北地区大学図書館協議会総会

標記会議が、9月20日(木)岩手県立大学が当番館となり、岩手県民情報交流センター「アイーナ」(盛岡)を会場として、加盟38館から75名の参加を得て開催され、次の協議題について意見交換を行った。

1) 東北地区大学図書館協議会学術奨励規程

の改正について

- 2) 学術奨励賞候補論文等審査取扱要項の改正について
- 3) 東北地区大学図書館協議会表彰規程の改正について
- 4) 東北地区大学図書館協議会の研修について
- 5) 第63回総会の当番地区(館)について
- 6) 平成19年度合同研修会について
- 7) 役員館の改選について

### 学 内

#### 19. 7. 6 平成19年度第3回附属図書館運営会議

##### ・協議事項

- 1) 外部評価委員会について
- 2) その他

##### ・報告事項

- 1) 第54回国立大学図書館協会総会について
- 2) 平成19年度第1回学術情報戦略会議報告について
- 3) 平成19年度第1回学術情報整備検討委員会・第1回学術情報資料選定小委員会(合同会議)報告について
- 4) 平成20年度概算要求事項について
- 5) 平成19年度総長裁量経費の内示について
- 6) その他

#### 19. 7. 27 平成19年度第2回附属図書館商議会

##### ・協議事項

- 1) 外部評価委員会について

2) 東北大学附属図書館調査研究室内規(案)等について

- 3) 平成19年度時間外開館経費及びキャンパス間搬送経費について
- 4) その他

##### ・報告事項

- 1) 附属図書館副館長選考委員会について
- 2) 第54回国立大学図書館協会総会について
- 3) 平成19年度第1回学術情報戦略会議報告について
- 4) 平成19年度第1回学術情報整備検討委員会・第1回学術情報資料選定小委員会(合同会議)報告について
- 5) 平成19年度川内地区図書委員会について
- 6) 平成20年度概算要求事項について
- 7) 平成19年度総長裁量経費の内示について
- 8) 平成19年度附属図書館企画展「絵葉書タイムトラベル」について
- 9) その他

## 人 事 異 動

平成19年9月30日現在

発令年月日	新 職	氏 名	旧 職	備 考
19. 9. 30		土 田 奈穂子	事務補佐員(総務課情報企画係)	任期満了

## 編 集 後 記

▼今号の記事にも紹介しております「東北大学の至宝」「文豪・夏目漱石」展には皆さま行かれましたでしょうか。会場が遠いため二の足を踏んでいらっしゃる方（私のように）もいるでしょうが、「東北大学の至宝」展は、仙台市博物館で、バージョンアップして開催

しますので是非ご覧いただけたらと思います。図書館としてもまた東北大学としてもこれまでになく規模と力の入れようです。わたしも河口慧海を含む「チベット」の部が大変楽しみであります。宮沢賢治ならぬ西域への憧れは止めようもございません。



---

東北大学附属図書館報「木這子」 第32巻第2号（通巻119号）発行日 平成19年9月30日

発行人 北村 明久 広報委員会委員長 加藤 信哉

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022-795-5911, FAX 022-795-5909  
URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>